平成28年度

高知大学国際連携推進センター年報

平成 28 年度　年 報 目 次

１．はじめに……3
（国際連携推進センター長からのご挨拶）

２．組織・スタッフ……4
（１）組織図
（２）スタッフ紹介

３．活動状況……5
３－１国際交流
（１）講演会等
① 講演会＆ワークショップ
「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」沈国威（関西大学・教授）
② 講演会
「ガーナ大学における国際交流」エベネザ・オドゥロ・オウス（ガーナ大学・学長）
③ 国際交流関係事務担当者研修会
「地域の大学に求められる国際化とは何か」新納宏（国際連携推進センター）※
④ 国際セミナー
「イラク・シリア難民問題の背景、現状と課題」原昌平（JICA 企画部国際援助協調企画室長）
（２）学長等表敬訪問等……8
① イェーテボリ大学（スウェーデン）の学長表敬訪問
② SUIJI ジョイントディグリーマスタープログラム学生の学長表敬訪問
③ SUIJI 国内サービスラーニングプログラム学生の学長表敬訪問
④ ガーナ大学長オウスの学長表敬訪問
⑤ さくらサイエンス及び「海外フィールドサイエンス実習」参加者の学長表敬訪問
⑥ 上海海洋大学の学長表敬訪問
⑦ さくらサイエンス学長表敬訪問
（３）JICA 委託事業……１２
① JICA 課題別研修「へき地教育の振興」コース」
② JICA 課題別研修「総合防災行政（B）コース」
③ JICA 課題別研修「コミュニティ防災（B）コース」
④ JICA 草の根技術協力事業「ネパールにおける防災と環境を両立させる現地適応型蛇籠技術普及事業」
（４）SUIJI セミナー……１６
第 6 回 SUIJI セミナーIN ガジャマダ大学　(インドネシア)

３－２留学生交流……１７
（１）留学生交流事業
① カルチャーカフェ（第 10 回～17 回）第 15 回は※
② 第 1 回高知大学インターナショナルデイ（第 1 回学長杯日本語スピーチコンテスト・交流懇親会等）※
③ 外国人留学生課外研修（香川県）
（２）地域交流事業等……２４
① 県立高知追手前高等学校にて留学生による「異文化理解」講義
② 大豊町庵谷地区星神社秋季大祭
③ 高知西高校にて「グローバル探究Ⅱ」
④ 留学生との交流会（特別支援学校）
⑤ 朝倉小校区青少年育成協議会主催料理教室「韓国料理に挑戦」
（３）短期プログラム受入事業……２８
協定校向け英語によるサマープログラム
（４）日本語授業関係（授業時間割、シラバスなど）……２９
（５）高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式……４１
（６）新入留学生対象オリエンテーション……４２
（７）帰国準備説明会……４３
（８）海外留学説明会……４４
（９）進学説明会……４７
① ジーベック 2016 年外国人留学生相談会（岡山）
② ジーベック 2016 年外国人留学生相談会、日本語学校訪問（香川）
③ 平成 28（2016）年度外国人学生のための進学説明会（東京）
④ 平成 28（2016）年度外国人学生のための進学説明会（大阪）
⑤ 日本留学説明会・フェア 2016（モンゴル）
（１０）出版・刊行物等……５０
留学生パンフレット（英語）、Annual Bulletin（英語）、高知大学国際交流 HP、Facebook

４．会議関係……５４
国際連携推進委員会、留学生専門委員会、国際連携推進センター運戦略室会議

５．資料……６３
交流協定締結一覧（大学間・部局間）、外国人留学生在籍（国別）、外部資金獲得状況、規則関連、評価関連資料、国際戦略、国際連携推進センター基本方針

※高知大学インターナショナルデー2016 関連行事

1. はじめに

ご挨拶
～地域の課題を世界と結び、もっと気軽に留学できる大学を目指す～

国際連携推進センター
センター長　新納　宏

2015 年に制定された高知大学国際戦略は「地域から世界へ、世界から地域へ、グローカルな双方向の国際連携を目指す」が柱です。地域の取組と海外の課題を結ぶ試みとして、高知大学では 2014 年から高知県の大きな課題である「津波防災」や「へき地教育」などをテーマとした JICA 国際研修を開始し、2016 年度には年間 3 コース、約 45 人の開発途上国の行政官を受け入れるまでになりました。

また、2017 年 4 月には、JICA 研修に合わせて欧米の研究者 5 人を招き、県内でも急ピッチで進んでいる「インクルーシブ教育」をテーマに国際セミナーを開きます。世界の動きを地域に伝える取組みのひとつです。

2016 年からは「学長杯第 1 回留学生日本語スピーチコンテスト」を開始しました。高知大学には常時 150 人余りの留学生がいます。大半は協定校からの交換留学生で日本語ができます。留学生は自国と日本を客観的に比較認識していますから、日本人にとっても留学生のスピーチを通して、日本を再認識する知る絶好の機会になります。2016 年 11 月に行ったコンテストでは 11 名の留学生が「私の見つけた日本」、「自分の夢」をテーマに発表し、会場では学生や一般の人々100 人以上が耳を傾けました。

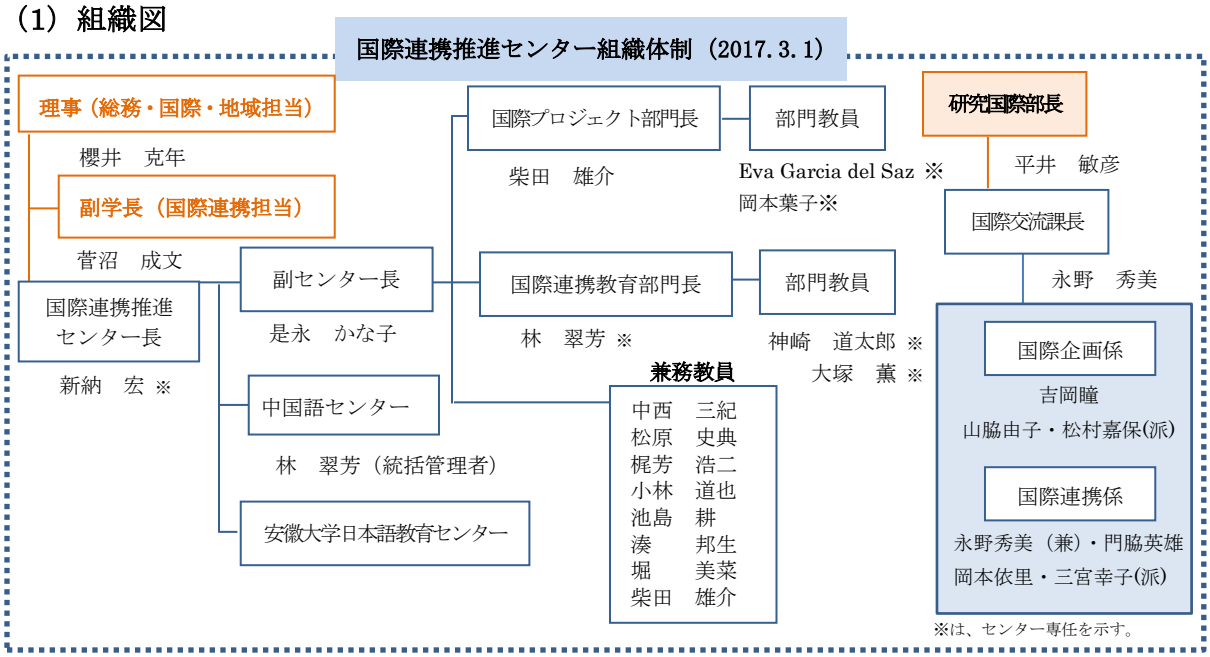
多様な海外協定校の学生にもっと高知に来てもらう取組みも行っています。2016 年に試行し、2017 年夏から本格実施予定の「サマープログラム」です。高知大学には英語で通年履修できるプログラムがなく、日本語を学習していない協定校の学生には留学しにくい大学になっています。そこで他大学の例も参考にしながら、特に英語圏からの留学生が高知の文化や日本語を学ぶことができる 2 週間ほどのプログラムを実施します。内容は和紙漉きから参禅まで、高知・日本文化の体験・理解と日本語学習です。

高知大生にもっと気軽に海外留学をしてもらうため、2017 年度から共通教育の正課の授業として短期海外留学を含む「グローバル・コミュニケーション」を開設します。これは、オーストラリアのクイーンズランド大学などへの短期語学研修を核に、プレゼンテーション手法、異文化体験に関する観察記録手法を勉強するものです。高知大生の半分以上は入学時に「できれば留学したい」と思っていながら、費用、語学力、就活などの理由で結局留学を断念する者が多いのが実情です。それを気軽に夏休みに短期留学してもらい、さらに長期留学への動機づくりをするという仕掛けです。

このように、国際連携推進センターは他大学の例も参考にしながら、留学生交流を核として、地域と海外を結びつける新たな取組みを少しずつ始めています。今後ともご指導やご支援をよろしくお願いします。

2. 組織・スタッフ（組織図、スタッフ紹介）

（1）組織図



（2）スタッフ紹介

副学長（国際連携担当）　菅沼　成文
国際連携推進センター長　新納　宏
副センター長　是永　かな子

[国際プロジェクト部門]

国際プロジェクト部門長　柴田　雄介
国際プロジェクト部門専任教員（助教）　GARCIA DEL SAZ EVA
国際プロジェクト部門専任教員（特任講師）　岡本　葉子

[国際連携教育部門]

国際連携教育部門長・専任教員（教授）　林　翠芳
国際連携教育部門専任教員（准教授）　神崎　道太郎
国際連携教育部門専任教員（准教授）　大塚　薫

[研究国際部国際交流課]

国際交流課長/兼国際連携係長　永野　秀美

[国際企画係]

国際企画係長　吉岡　瞳
国際企画係員　山脇　由子
国際企画係員　松村　嘉保

[国際連携係]

国際連携主任　門脇　英雄
国際連携主任　岡本　依里
国際連携係員　三宮　幸子

3. 活動状況

3-1 国際交流

（1）講演会

①講演会&ワークショップ「ソーシャルメディアと日本語教育」を開催

日時：平成28年6月11日

概要：高知大学国際連携推進センター主催の講演会及びワークショップが行われました。講師には、関西大学外国語学部教授沈国威氏をお招きし、「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」という演題で話をうかがいました。当日は梅雨の晴れ間に恵まれ、高知大学教職員、日本人学生、留学生のほか、県内そして県外からと多くの方に出席していただき、合計 50 名近くの参加となりました。

講演会では、西洋の近代的知識を採り入れるために、漢字文化圏において新語、訳語がどのように作られ、交流したかについて話されました。特に 16 世紀末の中国ではイエズス会士や新教宣教師らの訳語が直接現代中国語の語彙にならず、日本経由で中国に還流した話はとても興味深い内容でした。また、ビッグデータで捉えた語の使用頻度の変化についての紹介に関しても聴衆者一同興味深く聞き入っていました。

ワークショップでは、清末明初の政治家、ジャーナリスト、歴史学者の梁啓超氏の日本語との遭遇について紹介され、近代中国人日本語学習史研究の視点から「日本語は易しいか」について語られました。

参加した方々からは「沈教授のお話はユーモアにあふれ、とても専門的なことを分かりやすく、面白く理解させていただいた。これまで、日本と中国の漢字の由来については聞いたことがあったが、新聞等での使用量からの考察や、留学生の往来による影響があったことは、とても興味深かった」、「漢字語彙について大変興味深い分析により、いつ、どのように語彙の使用が変化していったかより明らかになった。社会、政治色々な要因がからんでいることがよくわかった」等の感想が寄せられました。

②講演会「ガーナ大学における国際交流」を開催

日時：平成28年9月5日

概要：ガーナ大学のエベネザ・オドウロ・オウス学長が高知大学を表敬訪問し、朝倉キャンパス内メディアホールにて「ガーナ大学における国際交流」について講演されました。本講演には、ガーナ出身の留学生 2 名、夏休みを利用してガーナから来日中の高校生 20 名、民間の国際交流団体ほか、62 名が参加しました。

ガーナ大学は 1948 年に創立された、学生数が 40211 人の総合大学で、2015 年 9 月に高知大学と国際交流協定を締結しました。講演の中でオウス学長は、今後も世界中の大学および企業や財団等とパートナーシップを結び、世界に通じる研究大学を目指してスタッフの能力開発、学生の交換留学プログラムの充実、教育の協力対策等に力を入れていくとの意向を示されました。最後の質疑応答では、大学構内に併設されている野口記念医学研究所での研究内容、奨学金、サポートの必要な学生に対する対応等の有意義な意見交換がなされました。

③高知地域留学生交流推進会議国際交流関係事務担当者研修会「地域の大学に求められる国際化とは何か」を実施

日時：平成28年11月30日

概要：同日に行われた他の交流イベントと合わせ、県内の国際交流関係者を対象に「地域の大学に求められる国際化」について、新納センター長が講演しました。

高知大学が他の多くの地方国立大学と同様「地域の大学」として位置づけられていることを確認。大学国際化の具体的なメニューを示した上で、高知大学の国際戦略や中期目標に示されている「地域と海外をつなぐ」をどう行っていくのか、いくつかの事例を示しながら説明しました。会場では県内の他大学の関係者など10数名が耳を傾けました。

④国際セミナー「イラク・シリア難民問題の背景、現状と課題」の講演会を開催

日時：平成29年1月11日

概要：国際協力機構（JICA）企画部国際援助協調企画室長の原昌平氏を講師にお招きし、元JICAイラク事務所長のご経験に基づいた「JICAのイラク支援と難民・国内避難民問題」を中心に講演していただきました。現場でご活躍された原氏ならではの具体的なお話を、今回、初め

て「難民・移民問題」について見聞する学生にも分かり易い言葉でご説明いただき、日本との比較も交えながら、私たちが当たり前だと思っている生活環境などについて再考できる機会となりました。本講演会へは、高知大学教職員・学生のほか、一般の方など約６０名の参加があり、参加者からは「難民・国内避難民の暮らしやその背景

について、またそのきっかけと現在起こっている事について、私たちができること・取り組んでみたいことを考えるきっかけになった。ぜひ自分でも調べて、次のステップの学習につなげたい」という声が聞かれるなど、より難民問題等を深く考え、行動につなげたいという熱い思いの感想などが寄せられました。

　最後に、講師から「現場で起こっている問題に対し、一人ひとりに関心を持ち続けてほしい」と熱いメッセージが送られました。

（２）学長表敬訪問等

①イェーテボリ大学（スウェーデン）の学長表敬訪問

日時：平成28年6月29日

概要：スウェーデンの協定校イェーテボリ大学の永野泰子教授が脇口学長を表敬訪問し、関係者と会談しました。

イェーテボリ大学は、本学の学生から人気の高い留学先の一つで、2006年の協定締結から今年で10年という節目を迎えたことについて、現在までの学生及び教職員を含む盛んな交流のお礼と今後の発展的交流についての意見交換が行われました。

また、永野教授からは、本学に留学してくる同校の学生は、特に自立した成績優秀な学生が多く、高知大学での修学後に進学や就職などでも更なるキャリアのステップアップにつながっている学生が多くいると感謝の言葉が述べられ、和やかな歓談となりました。

②SUIJIジョイントディグリーマスタープログラム学生の学長表敬訪問

日時：平成28年7月22日

概要：インドネシア（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）から愛媛大学、香川大学、高知大学に留学している学生11名が、脇口学長を表敬訪問しました。

SUIJI（Six University Initiative Japan Indonesia）とは、上記インドネシア３大学と四国3大学の６大学のコンソーシアムで、熱帯地域における農業発展に関する教育研究を協働で進めることを目指すものです。SUIJIジョイントディグリーマスタープログラムは、各大学に在籍する本プログラム学生が、在籍大学と受入大学の共同による研究指導の下で修士論文を作成することにより、大学院修士課程の修了をSUIJIコンソーシアムが認定することを趣旨とするもので、今回、11名の学生が本学実施の共同授業に参加するために本学に集まりました。

学長からは、「高知では、食の安全、地域貢献等をテーマに現場の視察をされると聞いている。ぜひ高知の風土と地域住民との交流を楽しむとともに、しっかり学んで帰っていただきたい。」とのメッセージが送られました。また参加学生からは、「高知での学びを楽しみにしてきた。高知大学の温かい歓迎に感謝する。」とのお礼の言葉が述べられました。

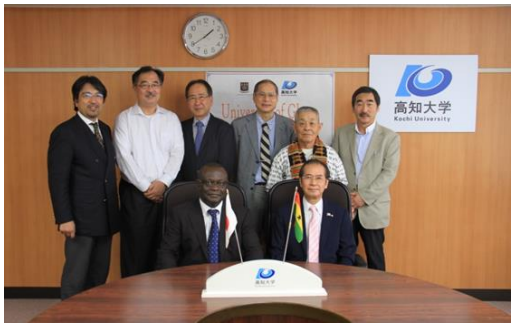
③SUIJI国内サービスラーニングプログラム学生の学長表敬訪問

日時：平成28年9月2日

概要：インドネシア人学生（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）、日本人学生（愛媛大学、香川大学、高知大学）でSUIJI国内サービスラーニングプログラムにて学んでいる学生36名が、脇口学長を表敬訪問しました。

SUIJI（Six University Initiative Japan Indonesia）とは、上記インドネシア３大学と四国3大学の６大学のコンソーシアムで、熱帯地域における農業発展に関する教育研究を協働で進めることを目指すものです。SUIJI国内サービスラーニングプログラムの高知サイトでは、各大学に在籍する本プログラム学生が、県下の3サイト（柏島サイト、安田サイト、室戸サイト）に分かれ地域に入って活動しながら地域における課題等について学んでいます。脇口学長からは、「高知の美しい自然とあたたかい人情に触れながら、理想を高く持ち学びを深めていただきたい」とのメッセージが送られました。また各サイトの参加学生から、「地域活動を通して問題解決の厳しさを感じるとともに、地域の人々の関わりや景観の美しさに支えられ日常生活では経験できない有意義な経験ができた」との活動報告がなされました。

④ガーナ大学長オウス氏が学長表敬訪問



日時：平成28年9月5日

概要：本学協定校であるガーナ大学のエベネザ・オドゥロ・オウス学長が脇口学長を表敬訪問し、関係者とともに歓談されました。

本学農学研究科の修了生で、教員としても本学での勤務経験のあるオウス氏が、今年ガーナにおける最大規模の大学であるガーナ

大学の学長に就任されたことを受け、脇口学長からは「今後も引き続きガーナ大学と本学との良好な関係を継続してほしいと望んでいる。また、アフリカの未来のために本学も協力したい。」と歓迎の挨拶があった後、オウス学長からは、「1人の留学生として、最初は『個』で始まった高知大学との関係が、現在ではお互いの大学が協定を結ぶなど機関交流に発展している。高知大学にはもはや『家族』として受け入れてもらっている。」と感謝の言葉が述べられ、和やかな歓談となりました。

⑤東南アジアの5大学から来日の学生が学長を表敬訪問

日時：平成28年11月8日

概要：東南アジアの5大学から、高知大学農学部が実施している「海外フィールドサイエンス実習」に参加するために来日した学生と教員が、脇口宏学長を表敬訪問しました。この「海外フィールドサイエンス実習」は、高知大学が協定締結している東南アジア諸国の大学との学生相互派遣事業の一つであり、2005年度から数えて本年度で12回目の開催となりました。農学・林学・水産学・環境学等を学ぶ学生に対して、我が国の先端技術と伝統技術を組合せた農林水産業の取組み、自然資源の利用・管理技術等を紹介し、科学技術に対する関心や理解を深めてもらい、農林水産業の将来を担う人材育成を図ることを目的としています。本年度は、JSTの「さくらサイエンス事業」としてタイ（カセサート大学、コンケン大学）、ベトナム（ハノイ教育大学）、マレーシア（サラワク大学）から参加した11名と、カセサート大学、コンケン大学、マレーシアプトラ大学から参加した15名が一緒に、高知大学の施設をはじめ、高知県内の研究機関や企業等で実習を行いました。

表敬訪問では、脇口学長より、「この実習の機会が、皆さんの母国と我が国との友好の礎となるとともに、皆さんが研究や留学のために再び高知大学に来てくださることを期待しております。」とのメッセージが送られました。

⑥上海海洋大学学長等による表敬訪問

日時：平成28年12月8日

概要：大学間協定校である上海海洋大学（中国）より、程裕東学長、鐘俊生教授／国際交流部部長ほか4名が脇口学長を表敬訪問しました。鐘俊生教授は、本学の修了生であり、2009年から2016年にわたって「高知大学帰国留学生ネットワーク（中国）」において同窓会会長を務められ、脇口学長から同窓会活動への貢献に対して御礼が述べられました。

会談では、大学改革や海洋に関する教育・研究について意見交換が行われたほか、朝倉キャンパス内及び宇佐の海洋生物研究教育施設を視察されました。2016年12月現在、本学では上海海洋大学からの交換留学生3名、上海海洋大学出身の国費留学生3名が学んでおり、今後も活発な交流が期待されます。

⑦さくらサイエンスプランによる学長表敬訪問

日時：平成29年1月18日

概要：科学技術振興機構（JST）の国際交流支援事業「日本･アジア青少年サイエンス交流事業」（さくらサイエンスプラン）により招へいしたフィリピン、台湾からの研究者、大学院生など10名が脇口学長を表敬訪問しました。

このプログラムは、本学の大学院総合人間自然科学研究科黒潮圏総合科学専攻が、さくらサイエンスプランの採択を受けて、1月16日から23日にかけて行われたものです。

今回は「持続型社会の構築を目指した沿岸・海洋管理研究最前線学」をテーマに、黒潮流域圏国の若手研究者を招へいし、我が国及び本学の最先端の海洋研究に触れ、講義や体験実習を通じて海洋科学技術への関心を一層深めていただくことを目的としています。

表敬訪問では、脇口学長から、「高知大学は、東南アジアとの交流を重視しており、今回、黒潮流域圏のフィリピンと台湾より海洋研究に携わる皆さんをお迎えし、高知大学が誇る最先端の研究に触れていただくことは、大変嬉しく思います。この機会が、高知大学に留学して頂くきっかけになることを期待し、また今後の皆さんの研究者としてのご活躍をお祈りします。」とのメッセージが送られました。

※科学技術振興機構（JST）「さくらサイエンスプラン」とは、産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指します。そしてアジアの青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジアと日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています。（さくらサイエンスプランのホームページhttp://ssp.jst.go.jp/outline/index.htmlから引用）

（３）**JICA委託事業**

①JICA 課題別研修「へき地教育の振興」コース

日時：平成 28 年 6 月 9 日～6 月 24 日

概要：JICA 課題別研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興－MDGs/EFA の達成に向けて」を実施しました。

多くの途上国で MDGs/EFA（MDGs＝国連ミレニアム開発目標、EFA＝国連 Education for All）の目標「初等教育の完全普及」が達成に近づくなか、依然としてへき地に居住する児童への学校教育へのアクセスが解決困難な課題として残っています。

日本は戦後、教育の地域間格差の是正を優先政策に掲げ、行政と教員が共同して数々のへき地教育振興施策に取り組んできました。特に法/制度整備、就学支援、施設改善、教員確保、学校/授業改善等の経験は有益であり、それらの応用は途上国のへき地教育問題の解決に貢献可能と考えられます。

本研修では、主に地方政府でへき地教育または学校指導に携わる行政官や教員養成学校の教員に対し、へき地教育振興施策に係る日本の経験を紹介し、参加国間の課題を共有することを通して、各国が抱える課題解決につなげることを目的として実施しました。

今回の研修では、アフリカ・アジアを中心に 9 か国 15 名の中央・地方の行政官、研究員などが参加し、へき地校での教育方法の視察や実習、地域住民と学校支援の取組みを視察しました。

視察先の例として、まず高知大学教育学部附属小学校において複式学級の指導法を視察・学習し、指導計画の作成の実習を行いました。また、へき地校として高知市の行川学園を訪問し、校内研修や授業研究について視察しました。さらに高知市の土佐山学舎を視察し、地域ボランティアや移住者等との懇談を通じ、地元との連携がいかに教育的観点からも重要であるかということを学びました。研修員は各学校での生徒との交流や給食も体験し、教育レベルの高さと教員の熱心さ、そして地域の方々と学校との連携の強さに驚いていました。

研修の最後には、帰国後の教育改善を促すアクションプランの発表会があり、教育改革案から学校の指導計画作りマニュアルまで各国の現場に応じたアイデアが披露されました。

研修員からは、「日本の複式学級における指導法は、問題解決や協力して学び合う能力

を高めることができると感じた。」、「へき地において、地元コミュニティが信念と希望を持って子供の可能性を信じ、学校と良好な関係を築いているのが印象的であった。」といった感想が寄せられました。

②JICA 課題別研修「総合防災行政 B コース」

日時：平成 28 年 8 月 24 日～9 月 28 日

概要：この研修コースは政府開発援助（ODA）の一環として、独立行政法人国際協力機構（JICA）から高知大学が受託して行ったものです。津波被害を含む災害が予測される 10 か国（南米カリブからチリ、ガイアナ、グレナダ、ジャマイカ、大洋州からパラオ、ナウル、フィジー、ソロモン諸島、アジアからフィリピン、バングラデシュ）から 14 名の行政官を招き、南海トラフ大地震等に対する防災に焦点をあて、神戸市、宮城県の被災地、高知県の順に、国、自治体、自主防災組織などの防災の取組みについて視察・講義を実施しました。

まず神戸では、各国の防災の現状をカントリーレポートとして発表し、その後日本の災害対策や神戸で積極的に取り組まれているコミュニティ防災（地元民が中心となって実施される自主防災対策）について学びました。その後、宮城県へ移動した後、行政・住民それぞれの目線での東日本大震災の復興状況と今後の防災対策について知見を深めました。

高知に移動後は、高知新港、浦戸湾外部、内部の三カ所を耐震補強することで津波の被害を軽減することを目的とした三重防御対策の建設現場を土木事務所の方と一緒に視察し、県庁や気象台の方から行政レベルで取り組んでいる防災対策についてご講義頂きました。

また、津波が起こった際に甚大な被害が想定される中土佐町に赴き、中土佐町役場の取り組みを担当者の方から直接ご説明頂き、久礼小学校では、小学校周辺を歩きながら災害時にどのような危険性が考えられるかを体験するフィールドワークにも子供達と一緒に参加しました。南海トラフ大地震対策以外にも風水害・地盤液状化・土砂災害といった様々な災害に関するプログラムを実施し、災害に対する総合的な防災対策について学ぶことにつながりました。

研修の最後には、自国で取り組むアクションプランの作成を行い、公共施設の耐震性の強化、防災マップの作成、コミュニティレベルでの防災意識向上への取り組み等、多岐にわたる提案が行われました。

研修員からは、「避難タワーなどといったハード面と、日頃からの避難訓練等のソフト面が合わさったときに初めて完璧な防災となると実感した。」「県、市や町、専門家、そして住民といった全ての人が防災に対して共に取り組み、関係性を強めることがいかに重要か学んだ。」「高知のコミュニティにおける災害時の自助・共助の意識を高める取り組みがすばらしいと感じた。自国でも同様の啓発を図りたい。」といった感想が寄せられた。

③JICA 課題別研修「コミュニティ防災 B コース」

日時：平成 29 年 2 月 9 日～3 月 17 日

概要：政府開発援助（ODA）の一環として、独立行政法人国際協力機構（JICA）から国際連携推進センターが受託して実施したものであり、津波被害や台風、土砂災害など各種災害が予測される 10 カ国（南アフリカのブルンジ、大洋州からフィジー、ソロモン、ツバル、モーリシャス、ミクロネシア、南米・カリブからジャマイカ、ペルー、セントルシア、アジアからはスリランカ）から行政官、大学教員及び NGO スタッフら 15 名が研修に参加しました。

研修では阪神大震災のあった兵庫県神戸市、東日本大震災の被災地の一つである宮城県東松島市、また南海トラフ大地震対策を積極的に行う高知県内の自主防災組織や自治体等を訪問し、コミュニティにおける自助・共助の考えをベースにした防災の取組について講義や視察を実施しました。四万十町立興津小学校の訪問では、学校の避難訓練に研修員も参加し、小学生と一緒に高台の裏山まで子供達と全力疾走で避難をするなど子供たち主体の防災訓練を学ぶことができました。また、四万十市古津賀地区では地元の自主防災組織の方々と一緒に消火訓練を行い、黒潮町立伊与喜小学校では炊き出し訓練に参加するなど、コミュニティレベルの防災意識向上の取組がどのように行われているのかを、地域の方々との交流を通じて実感して頂きました。

研修の最後には、日本で学んだ成果を自国に応用することを目指した行動計画を作成、「避難訓練や家具の固定、住民による危険区域と避難ルートのマッピング、災害時の非常食の準備など、災害に備えたコミュニティ活動について多くのことを学ぶことができた。」「防災教育がコミュニティに浸透するには時間がかかるが、研修で見た実践例は自国で教育方法を作成するのに大いに役立つだろう。」といった感想が寄せられた。

④JICA 草の根技術協力事業地域活性化特別枠「ネパールにおける防災と環境を両立させる現地適応型蛇籠技術普及事業」

日時：平成 29 年 3 月 1 日

概要：JICA 草の根技術協力事業地域活性化特別枠「ネパールにおける防災と環境を両立させる現地適応型蛇籠技術普及事業」において、高知大学は事業実施団体として JICA 四国と契約を締結しました。

本事業は、本学防災推進センターと国際連携推進センターが共同して、本学の有する土木工学や防災・減災に関する技術・知見を生かし、提案団体である高知県梼原町やカウンターパートであるネパール国の NGO とともに、今後 3 年間、カトマンズ郊外の Dhading 郡において、「蛇籠」の技術を利用したネパール地震の復旧と防災技術の普及に取り組むものです。梼原町の有する蛇籠技術をネパール国 Dhading 郡に移転し、改良蛇籠を使用した安心・安全な復興促進を目指します。

また、梼原町技術者とネパール国技術者との相互訪問により、改良型蛇籠の試験設置、実地指導を行い、ネパールに適した防災蛇籠の設計・施工ガイドラインを作成します。このことにより、日本の伝統的知見を活かした現地適応型防災蛇籠技術の普及とネパール国 Dhading 郡における道路安全性が向上することを目標としています。

「蛇籠」とは金網製の籠の内部に石・岩を詰め、斜面を補強する伝統的工法であり、日本では梼原町などの山間の道路斜面や河川護岸で使用されています。

（４）第6回SUIJIセミナーINガジャマダ大学 (インドネシア) に参加

日時：平成28年9月24日～9月26日

概要：インドネシアのガジャマダ大学で行われた「第6回SUIJIセミナーINガジャマダ大学」に、脇口学長、櫻井理事（総務・国際・地域担当）、尾形農学部長、池島SUIJI推進室長など教職員8名のほか、学生1名が参加しました。

第6回目となる本セミナーは、ガジャマダ大学がSUIJIコンソーシアム機構長として当番開催したもので、インドネシア3大学（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）及び四国3大学（愛媛大学、香川大学、高知大学）の教職員、学生が出席しました。

9月25日のSUIJIセミナー総会では、「国際戦略や国際協力活動の今後の取組み」について、6大学の学長等から各大学での取組みの説明が行われ、今後のSUIJIとの連携教育の在り方などについて提言がありました。

6大学の学生のプレゼンテーションでは、SUIJI-JDP-Ms（SUIJIジョイントディグリー・マスター・プログラム）による研究内容の発表のほか、学生たちがサービス・ラーニングと関連した活動等についてその経験を活かした発表を行い、本学からは農学部４年生の朴智徳さんが留学中の経験や体験から学んだことについて英語で発表を行いました。

また、前日の23日にはSUIJI構成大学による６大学SUIJI推進室会議、26日にはエクスカーションが行われました。

※SUIJI(Six University Initiative Japan Indonesia)とは、2011年に創設したインドネシア3大学（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）、四国3大学（愛媛大学、香川大学、高知大学）の6大学のコンソーシアムであり、熱帯地域における農業発展に関する教育研究を協働ですすめることを目指すもの。

3-2　留学生交流

（1）留学生交流事業

①第１回 高知大学インターナショナルデイ(第1回学長杯日本語スピーチコンテスト、交流懇談会等)

日時：平成28年11月30日

概要：高知大学朝倉キャンパスにて、「第１回 高知大学インターナショナルデイ」を開催しました。一日を通して「海外留学説明会」、「国際交流関係事務担当者研修会」、今回はアルゼンチンの文化を紹介した「第15回カルチャーカフェ」、「第１回学長杯留学生による日本語スピーチコンテスト」が行われ、学内外から、のべ100名以上の参加者が訪れました。

＜最優秀賞　チャン・スンフン君＞

日本語スピーチコンテストでは11名の留学生が出場し、脇口学長からは、「宗教の観点では、話す言葉は、神がその人にその言葉を伝えさせるもので、言葉は大切にしなければならない。また、自分が感じるだけでは、相手に考えていることが伝わらない。けれども、取り繕った言葉では相手に気持ちは伝わらない。感じたことを言葉に表すということが大事なのだと思う。」とのメッセージが送られました。

「日韓の架け橋に」をテーマに発表した韓国からの留学生 張昇勲（チャン スンフン）さんが最優秀賞に選ばれ、脇口学長からトロフィーが授与されました。学長をはじめ学内外の関係者のほか、日本人学生が運営する国際交流団体、会場の参加者も審査に加わり、出場者全員に「優しい心があるで賞」、「高知を愛しているで賞」など、それぞれの発表に応じたネーミングの表彰状と記念品が授与されました。また、参加者からは、「留学生の日本語の流暢さに驚くとともに、彼らの堂々と夢を語る姿に感動し、勇気をもらえた」などの感想が寄せられました。

＜日本語スピーチコンテストの様子＞

最後に、学内生協食堂で交流懇談会が行われ、留学生、日本人学生、教職員および学外関係者が、スピーチコンテストの感想を共有しながら交流を深めました。

＜交流懇談会の様子＞

②カルチャーカフェ

第10回カルチャーカフェ

日時：平成28年4月20日

概要：「フィリピン」をテーマに行われ、留学生13名、日本人学生9名、学外者5名、教職員8名の合計35名が参加しました。

フィリピンからの留学生を代表し、ジェイビー・サコさんとエマ・バラッドさんがフ

ィリピンについてのプレゼンテーションを行いました。フィリピンには国で定められた様々なものがあり、国旗や国鳥、国花はもちろんのこと、国の動物、魚、食べ物、車、ダンスなどがあるそうです。

また、各テーブルにはプト・マヤ（もち米とココナッツミルクで作ったライスケーキ）とココアの試食が準備され、参加者はフィリピンのおやつを食べながら交流を図りました。留学生によるフィリピンの曲のギター演奏もあり、フィリピンの文化等について理解を深めることができる楽しいカルチャーカフェになりました。

第11回カルチャーカフェ

日時：平成28年5月18日

概要：「ネパール」をテーマに行われ、留学生3名、日本人学生5名、学外者1名、教職員8名の合計17名が参加しました。

ネパールからの留学生を代表し、ナラヤン・カンデルさんとハリ・バハドゥール・ゴレさんがネパールの地理、観光地、食べ物などについてのプレゼンテーションを行いました。ネパールは120以上もの民族があり、100近い言語が話されている国で、留学生2名も違う民族の出身だという話や、ヒマラヤ山脈に登山する場合、入山料として一人が100万円以上のお金を払わないといけないという話に、参加者全員がとても驚いていました。

各テーブルにはネパールで多く飲食されているチャイ（ミルクティー）とゴマ団子が準備され、参加者はスパイスの効いたネパールの味を楽しみながら交流をしました。日本人学生が民族衣装を身に着け参加者に紹介する場面もあり、ネパールの文化等について理解を深めることができるカルチャーカフェになりました。

第12回カルチャーカフェ

日時：平成28年6月15日

概要：「日本の茶道」をテーマにおうちクラブ1階学生ラウンジで行われ、日本人学生9名、学外者3名、教職員1名の合計13名が参加しました。茶道部を代表し、部長の岸田衣里加さんと副部長の島章恵さんが茶道の歴史、道具、作法などについて英語でプレゼンテーションを行いました。茶道具の、茶碗や茶せんだけではなく水差し、なつめ、茶杓などを展示し、初めての人にも親しんでもらえるよう工夫をしました。茶道は季節感をとても大事にしており、今回はハイビスカスの茶碗や青葉楓の茶菓子がふるまわれました。

また、茶道部のメンバーからも「わびさび」など日本語にしかない言葉を英語で説明する難しさを感じたという感想が出るなど、もてなす側の学生にとっても貴重な体験ができたそうです。参加者が実際にお茶をたてる場面もあり、日本の伝統文化を理解し体験できるカルチャーカフェになりました。

第13回カルチャーカフェ

日時：平成28年7月20日

概要：「オーストラリア」をテーマに行われ、日本人学生3名、留学生8名、学外者9名、教職員10名の合計30名が参加しました。

オーストラリアからの交換留学生、マット・ワイズさんがオーストラリアの歴史についてプレゼンテーションを行いました。アボリジニの文化や第一次・第二次世界大戦、ベトナム戦争、他国との関係も交えながら様々な角度から歴史の紹介を行いました。

その後はオーストラリアを代表するお菓子、ラミントンと飲み物がふるまわれ参加者は様々な話題で交流をしました。会場にはコアラのぬいぐるみやタペストリーなどもたくさん飾られ、オーストラリアの文化を理解できるカルチャーカフェになりました。

第14回カルチャーカフェ

日時：平成28年10月26日

概要：「イギリス」をテーマに行われ、日本人学生8名、留学生2名、学外の方7名、教職員6名の合計23名が参加しました。

イギリス出身の特任講師、マイケル・シャープ先生がイギリスの食べ物やイギリス独特のスポーツやゲーム、方言などについてプレゼンテーションを行いました。特にロンドン市内の一部の労働者階級で使われるコックニーの発音やスラングは我々日本人が学校で習う英語とはかけ離れていて、参加者も驚いていました。その後はアフタヌーンティーの入れ方や飲み方などのデモンストレーション も行われました。

各テーブルにはイギリスのティータイムで食べられているサンドイッチやスコーン、ケーキなどが用意され、参加者はシャープ先生が入れたお茶と一緒に楽しみました。会場には様々なティーポットやケーキやスコーンを飾るお皿などが展示され、とてもイギリスらしい雰囲気の中で行われたカルチャーカフェになりました。

第15回カルチャーカフェ

日時：平成28年11月30日

概要：インターナショナルデイのイベントのひとつとして、「アルゼンチン」をテーマに行われ、日本人学生5名、留学生12名、教職員10名、学外の方17名の合計44名が参加しました。

医学専攻（博士課程）のホセ・ラウティエールさんがアルゼンチンなど南米で多く飲用されているマテ茶の説明を中心に、地理や歴史な

どについてプレゼンテーションを行いました。その後、実際にマテ茶の入れ方や飲み方のデモンストレーションを行い、ストローを持たない、3口で飲みきる、お湯をつぎ足しながら順番に回して飲む、という飲み方のルールも説明しました。

各テーブルにはホセさん自身が焼いたアルゼンチンで広く親しまれているジャムをのせたクッキーや軽く焼いたフランスパンが用意され、参加者はマテ茶と一緒に楽しみました。

インターナショナルデイにふさわしく、今回のカルチャーカフェには日本を含む12か国からの参加があり、国際色豊かなものとなりました。

第16回カルチャーカフェ

日時：平成28年12月21日

概要：第16回目となる今回は「タイ」をテーマに行われ、留学生4名、学外の方1名、教職員7名の合計12名が参加しました。

総合人間自然科学研究科医科学専攻2年に在籍している、タイからの留学生タンヤー・リーラシリウォンさんが、民族、寺院、アクティビティ、自然、食べ物などさまざまな事柄についてプレゼンテーションを行いました。タイ語に関する簡単な講義も行われ、子音が44、母音が32あるという説明に参加者は驚き、その後タイ語の簡単なあいさつを参加者全員で練習しました。

各テーブルにはタイでよく食べられている春雨のサラダとグリーンカレー、タピオカなどが用意され、ココナツミルクの香りが漂う中、参加者はスパイシーなタイ料理を楽しみました。

第17回カルチャーカフェ

日時：平成28年12月21日

概要：「カナダ」がテーマで、留学生5名、日本人学生8名、高校生等の地域住民14名、教職員8名の合計35名が参加しました。

　カナダ出身のダレン・リングリー教授（人文社会科学部）が、ヨーロッパの人々のカナダへの入植、ネイティブ・カナディアンとの関わり、国技であるアイスホッケーや、メープルシロップの作り方について、英語とフランス語の公用語について、隣国であるアメリカとの関係など、多岐にわたって英語で紹介しました。

　各テーブルにはカナダでよく食べられているサーモンをのせたカナッペや、ニュー・ブランズウィック州の特産品であるブルーベリーを使ったタルトなどが用意され、カナダでは非常に有名なコーヒーチェーン、ティム・ホートンズのコーヒーとともにいただきました。会場にはカナダの写真や国旗、本などが飾られ、たくさんのメープルリーフに囲まれたカルチャーカフェになりました。

③外国人留学生課外研修

日時：平成28年11月20日

概要：11月20日（日）に今年度新たに入学した外国人留学生を対象に、香川県仲多度郡琴平町でうどん打ち体験と町内史跡巡りへの課外研修を実施しました。この研修は外国人留学生が日本及び地域の歴史・文化を学び理解を深めるとともに、留学生間の親睦・交流を図ることを目的としており、留学生45名、教職員7名が参加しました。

<うどん学校で記念写真>

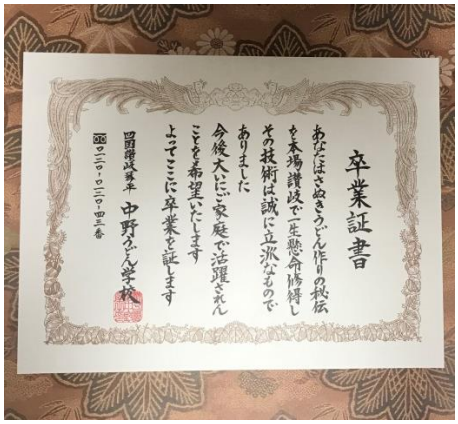
　会場では、うどん学校の講師によるうどんの作り方や小麦粉と水や塩の分量についての説明がありました。その後、グループに分かれてうどん作りに挑戦し、ダンス音楽に合わせてリズミカルに生地を踏む工程ではテンポアップするにつれて参加者全員が大いに盛り上がりました。体験後、それぞれのグループで作ったうどんをおいしく食べました。

午後は、事前にもらった研修のしおりを片手に、琴平町界隈にある観光スポットやお土産物屋を見ながら、金刀平羅宮に続く1368段の階段を時間が許す限り上っていきました。

参加した留学生からは「うどんの作り方だけでなく、日本の古い建物も伝統的な文化も体験できた」、「今回の研修を通じて、ほかの留学生となかよくなり、かけがえのない思い出となった」などの感想が寄せられ、留学生にとって日本の文化と歴史を知る大変有意義な研修旅行となりました。

<リズミカルにうどん生地を踏む留学生>

上手にできた



卒業証書

あなたはさぬきうどん作りの秘伝を本場讃岐で一生懸命習得しその技術は誠に立派なものでありました
今後大いにご家庭で活躍されんことを希望いたします
よってここに卒業を証します
昭和讃岐第弟 中野うどん学校
平成二十九年三月四日

留学生が描いたイラスト

（２）地域交流事業

①県立高校で留学生が授業

日時：平成28年6月10日

概要：高知県立高知追手前高等学校の３年生対象の授業として、「異文化理解講座」が開催され、本学の留学生９名が講師として参加しました。

＜校長室での留学生紹介＞

講座は、９グループの教室において、インドネシア、ウクライナ、中国、台湾、ベトナム、モンゴル、ネパール、スウェーデン、ロシアの９カ国・地域の各留学生が、①なぜ日本、高知を留学先に選んだのか、②母国の代表的な衣食住の文化（人々の生活様式やその背景にあるものの見方）、③母国の課題（経済、教育、社会政策など）、或いは考え始めたことを高校生に投げかけ、一緒に考えてもらうという内容で行われました。

高校生たちは、普段あまり接することが少ない国の留学生から初めて聞くその国特有の文化や生活の話に真剣に耳を傾けていました。また留学生から発せられる質問などに、最初は恥ずかしがって静かだったものの留学生の流暢な日本語で打ち解けることができ、活発な意見交換が行われ大変有意義な授業になった様子でした。

＜授業を担当する留学生（中国）＞

＜授業を担当する留学生（モンゴル）＞

＜授業を担当する留学生（ロシア）＞

〈授業を終えて屋上での記念撮影する本学留学生及び教職員〉

②大豊町庵谷地区星神社秋季大祭

日時：平成28年10月20日

概要：高知地域留学生交流推進会議の地域交流事業の一環として、高知県長岡郡大豊町にある星神社の秋季大祭に高知大学の留学生5名と引率のセンター教員1名が参加しました。

朝8時にバスにて朝倉キャンパスを出発し、9時に星神社に到着しました。まず、神社と秋季大祭についての説明を聞きました。次に、神様へのお供えと祝詞の神事のため御神輿を担ぐ男子学生は法被に着替え、拝殿に入りました。その他の留学生は、御神輿に同行する者が持つ弓、長刀などの神事に使用する道具の説明を地元の方から受け、興味深く聞いていました。

その後、1kmほどの大豊町の山間を地元の方々、御神輿とともに練り歩きました。途中の休憩では、地元の方々との話に花が咲いていました。そして、定められた場所で御神輿をすえ、祝詞をあげる神事が終わり、その場でお供え物のお餅を分けていただき、持ち寄りのお菓子などで祝いの行事をしました。最後に、拝殿に戻り、神事は無事終了しました。交流会を開始し、地元の山菜、茸、ちらし寿司､そして天然鮎などが振る舞われ、留学生たちは、山菜などの郷土の味に舌鼓を打ち、お神酒を酌み交わしながら地元の方々と祭りの慣わしについて質問をしたり、郷土料理の話で盛り上がっていました。

留学生にとって初めての神社での神事と地元の方々との交流は、貴重な体験になったようでした。地元の方々にはいつも歓迎頂き、今後もこのような行事が続けられるようにとの思いを共有しました。

③高知県立高知西高等学校「グローバル探究Ⅱ」海外リサーチ発表会講評

日時：平成28年10月21日、11月11日

概要：10月21日に高知県立高知西高等学校は「食を活かした地域創生」をテーマにスーパーグローバルハイスクール校としての取り組みを行っています。その中でグローバル人材育成のための「グローバル探究Ⅱ」科目では2年生の生徒たちが各グループで地域課題を取り上げ､解決のための仮説を立てて､研究する取り組みを行っています。高大連携促進のために、アドバイス教員として新納国際連携推進センター長が招かれました。新納センター長は高校生の発表を聞き、研究の進め方、調査やデータの取り方などについて指導しました。

また、11月11日には海外リサーチ発表会が同校にて開催されました。グループ発表の講評のため本学国際連携推進センター教員の派遣要請がありました。今回は国際プロジェクト部門長である柴田雄介特任講師が参加し、それぞれのグループが香港・台湾・シンガポール・オーストラリアの4ヶ国において独自に設定した探求テーマにおける探求活動の発表を聞きました。その後、柴田特任講師が主にプレゼン手法や英語学習の観点から発表内容に対する所感を述べるとともに指導・助言を行いました。

④教育学部附属特別支援学校主催“留学生との交流会”

日時：平成29年1月21日

概要：スウェーデンのイェーテボリ大学からの交換留学生2名と台湾の東海大学からの交換留学生1名、中国出身で農林海洋科学部1年生1名が、教育学部附属特別支援学校が主催する「留学生との交流会」に参加しました。この交流会は、毎年1月に特別支援学校に通う生徒とその保護者が、留学生と一緒にその国の代表的な料理を作ることにより親睦を深めるもので、今回は教職員も含めて39名の参加がありました。

交流会では、まずイェーテボリ大学からの留学生がスウェーデンの場所や気候といった基本情報に加えて、よく見られる野生動物などについて説明しました。次に東海大学からの留学生が、台湾の観光名所やよく食べられている台湾料理の紹介を行いました。発表を聞いた生徒から、2つの国について自分が知っていることや発表者への質問が口々に飛び交う活発で楽しい時間となりました。

その後、２つのグループに分かれて、台湾で人気の家庭料理でバジルの香りが特徴的な鶏肉料理の三杯鶏（サンベイジー）とスウェーデンでよく食べられているチョコレートケーキを作りました。最初は、初めて作る料理の手順がわからず戸惑う参加者もいましたが、分からないところを留学生に確認しながら、協力して調理をしました。会食はスウェーデン人にとって大事な文化であるフィーカというティータイムも兼ねており、コーヒーや紅茶、ジュースやハーブティーなど様々な種類の飲み物が用意され、参加者はそれぞれが好きな飲み物とともに、初めて食べる料理と留学生との会話を楽しみました。

交流会の最後には、生徒からお礼の言葉とともに、生徒が授業で作った木工作品や、hocco sweetsのお菓子などが手渡され、留学生は「今日はとても楽しかった。素敵なプレゼントをありがとう」と喜んでいました。

⑤朝倉小校区青少年育成協議会主催料理教室

日時：平成29年2月5日

概要：朝倉小校区青少年育成協議会主催による朝倉中学校の生徒を対象にした料理教室が、朝倉ふれあいセンターにて開催されました。今回のテーマは「韓国料理に挑戦！」で、本学の韓国出身の留学生、朴ハンビさんが講師に招かれ、「ダットリタン」と「チャプチェ」、「わかめスープ」の作り方を指導しました。朝倉中学校の生徒たちは、料理の作り方の説明に熱心に耳を傾け、レシピを見て質問しながら韓国料理作りにチャレンジしていました。料理はなかなかの出来栄えで、参加者一同でおいしく食べました。韓国語の簡単な挨拶も紹介され、皆で「チャルモッケスムニダ（いただきます）」と言ってから、自分たちで作った力作を味わいました。

中学生からは、「韓国料理は辛いイメージがあったけど、ヘルシーでボリュームがあっておいしい」、「早速、家でも作りたい」との感想が寄せられました。朴ハンビさんからは、「料理は好きだが皆さんに上手く教えられるか心配でした。でも、皆さんと楽しみながらおいしい料理が作れて嬉しかった。これを機に、隣りの国、韓国についても興味を持ってもらいたい」との感想がありました。当日は中学校の生徒たちだけでなく、朝倉中学校の先生及び青少年育成協議会のメンバーも参加され、食を通じて国際交流、異文化理解を図ることができました。

（３）短期プログラム（受入）事業

①協定校向け英語によるサマープログラムの実施

時期：平成 28 年 7 月 18 日～平成 28 年 7 月 27 日

概要：本学の海外協定校の学生を対象に英語による夏期短期プログラムを実施し、4 ヶ国から 15 名の学生が 10 日間のプログラムに参加しました (表 1)。

表 1　サマープログラム参加者詳細

協定校	参加者
ハンゼ応用科学大学 (オランダ)	1 (女性)
国立ポリテク工科大学 (メキシコ)	1 (男性)
サルティジョ工科大学 (メキシコ)	1 (男性)
ロードアイランド大学 (米国)	10 (女性 5、男性 5)
チェンマイ大学 (タイ)	2 (女性)

プログラムは日本や高知の文化体験を中心に学内外で行われました (表 2)。一部プログラムには本学の学生も参加し、海外協定校の学生と交流を持ちました。今後も毎年継続して実施することで、本学の協定校における認知度・存在感を高め、交換留学希望者増加につなげるのを目標にしています。

表 2　サマープログラムの主な内容

内容	場所
高知の食文化 (鰹のタタキ藁焼き体験)	土佐たたき道場
日本の植物	県立牧野植物園
日本の宗教 (仏教)	竹林寺
土佐の伝統工芸 (土佐和紙紙すき体験)	いの町紙の博物館
高知の自然 (屋形船乗船)	(株) 屋形船仁淀川
日本のポップカルチャー体験 (カラオケ)	Banana Club
高知大の研究施設視察	海洋コア総合研究センター
マリーンスポーツ	県立公園ヤ・シィパーク
禅体験	人間禅四国道場
伝統話芸 (英語落語)	本学 (TSP 国際人材育成コース専門科目の一部を提供)
日本の祭り	朝倉神社

（４）日本語授業関係（授業時間割、シラバス等）

＜2016年度第1学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

時限	開講キャンパス	月（MON）	火（TUE）	水（WED）	木（THU）	金（FRI）
Ⅰ 8:50～ 10:20	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）		初級Ⅳ （神崎）	中級漢字・語彙Ⅰ （尾中）	初級Ⅳ（今井）	
Ⅱ 10:30～ 12:00	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）	中級作文 （神崎） 中級聴解・会話 （大塚）	初級Ⅱ （神崎）	初中級会話Ⅰ （大塚）	初級文法（神崎） 初級Ⅱ（今井）	中級会話Ⅰ （池）
Ⅲ 13:10～ 14:40	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）	初級文法 （神崎）	中級聴解Ⅰ （石川） 基礎日本語 （神崎）		アカデミック日本語Ⅰ （大塚・林）	初中級文型 （吉田）
Ⅳ 14:50～ 16:20	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）		基礎日本語 （神崎）			
Ⅴ 16:30～ 18:00	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）			日本語中級 （東條）	日本語初級・日本事情 （東條）	

＜2016年度第2学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

時限	開講キャンパス	月（MON）	火（TUE）	水（WED）	木（THU）	金（FRI）
Ⅰ 8:50～ 10:20	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）		中級聴解Ⅱ（林） 初中級聴解・会話 （今井）	中級漢字・語彙Ⅰ （尾中）		
Ⅱ 10:30～ 12:00	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）	アカデミック 日本語Ⅱ（林） 基礎日本語（吉田）	基礎日本語（林） 初級Ⅰ（神崎） 初級Ⅲ（今井）	高知文化事情 （エバ） 基礎日本語（池）	中級読解（神崎） 初級Ⅰ（石川）	中級漢字・語彙Ⅱ （池） 基礎日本語（吉田）
Ⅲ 13:10～ 14:40	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）		初中級会話Ⅱ （大塚） 日本事情 （東條・今井）	初級Ⅱ（神崎）	初中級文法 （尾中） 初級Ⅲ（今井）	
Ⅳ 14:50～ 16:20	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）			初級Ⅱ（神崎）	中級会話Ⅱ （尾中）	
Ⅴ 16:30～ 18:00	日本語総合（朝倉） 日本語総合（物部） 日本語総合（岡豊）		日本語中級（東條）		日本語初級・ 日本事情（東條）	

2016年度日本語総合コース
第１学期授業シラバス＜朝倉キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4月第3週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。科目名は初級レベル対象の「初級文法」、中級レベル対象の「初中級会話Ⅰ」、「初中級文型」、「中級作文」、「中級聴解Ⅰ」、「中級漢字･語彙Ⅰ」、「中級会話Ⅰ」、中上級レベル対象の「アカデミック日本語Ⅰ」である。

Ⅱ. 授業レベルについて

初級レベルは、初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験N5レベルとする。

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、中級前半から中級後半レベルへの4技能の実力向上を図る。到達目標は日本語能力試験N2レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験N2レベルの学生を対象とし、上級レベルへの4技能の実力向上を図り、到達目標は日本語能力試験N1レベルとする。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初級文法	神崎　道太郎	月曜日３限・木曜日２限

授業内容：　①教室のことば、ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

テキスト：　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク

評価方法：　課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初中級会話Ⅰ	大塚　薫	水曜日２限

授業目標：　留学生が主人公のマンガを通して日本人の季節感、現代日本の家族について理解を深める。また、それぞれの課で話題となっている内容について自国の文化と比較し、グループで話し合い発表の能力を高めることを目標とする。

テキスト：　『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』アルク

評価方法：　期末試験、出席、課題・受講態度

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初中級文型	吉田　鈴香	金曜日２限

授業目標：　初級の学習者にとって紛らわしい文型の復習をする。そして、その使い分けができるようになることを目標とする。

テキスト：　『日本語集中トレーニング―初級から中級へ―』アルク
評価方法：　出席、課題、期末試験

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
中級作文	神崎　道太郎	月曜日２限

授業目標：　さまざまな機能表現を学ぶと同時に、短文から段落作成、体験報告などの一般文章の作成、そして資料を利用したレポートの書き方へと文章構成を段階的なトレーニングで論理的な日本語が書けるようになることをめざす。
テキスト：　ハンドアウト
評価方法：　課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
中級聴解Ⅰ	石川　啓子	火曜日３限

授業目標：　基本的な聴き取り練習を通して語彙や表現を増やし、聴解、読解、会話能力の向上を図る。
テキスト：　『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉基礎編』スリーエーネットワーク
評価方法：　出席、授業中の活動、提出物

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
中級漢字・語彙Ⅰ	尾中　美代子	水曜日１限

授業目標：　中級レベルにふさわしい語彙力と表現能力を身につける。
テキスト：　『コロケーションが身につく日本語表現練習帳』研究社
評価方法：　期末試験、受講態度、課題

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
中級会話Ⅰ	池　純子	金曜日２限

授業目標：　グループディスカッションや発表を通して、言いたいことを適切に相手に伝えるための日本語のコミュニケーション能力を育成する。
テキスト：　『コミュニケーションのためのクラス活動 40』スリーエーネットワーク
評価方法：　期末試験、課題・受講態度

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
アカデミック日本語Ⅰ	林翠芳・大塚薫	木曜日３限

授業内容：　大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。
テキスト：　ハンドアウト
評価方法：　最終発表、課題、出席・受講態度

2016年度日本語総合コース
第１学期授業シラバス＜岡豊キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」と「日本語中級」を週１コマずつ設け、2016年4月第3週から2016年7月まで15週間開講する。

Ⅱ. 授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわれる内容とする。

「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、中級レベルの4技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験N2レベルとする。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時間*
日本語初級・日本事情	東條　美紀	木曜日５限

授業内容：　初級の日本語を使って会話を楽しむ。
使用教材：　『にほんご これだけ！』2　ココ出版
評価方法：　出席、課題、授業態度

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時間*
日本語中級	東條　美紀	水曜日５限

授業内容：　まとまった文章を書き、自国の紹介や文化について語ることができることを目指す。授業前半で文法の復習、後半でテーマをきめて作文を完成させる。

使用教材：　『中級日本語文法総まとめポイント20』(スリーエーネットワーク)及び自主教材
評価方法：　出席、課題、授業態度

2016年度日本語総合コース
第１学期授業シラバス＜物部キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4月第3週から始まり、日本語を初めて学ぶ学習者を対象とした「基礎日本語」、日本語初級前半を習得している学習者を対象とする「初級Ⅱ」、日本語初級を修了した学習者を対象とする「初級Ⅳ」を週2コマずつ設ける。また、既習者で中級レベルの学生を対象とした「中級聴解・会話」を週1コマ開講する。

Ⅱ. 授業レベルについて

「基礎日本語」は、初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験N5レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語初級前半を学習している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験N5レベルとする。

「初級Ⅳ」は日本語初級前半を習得している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験N4レベルとする。

「中級聴解・会話」は、初中級修了レベルの学生を対象とし、中級から上級レベルへの聴解・会話能力の向上を図る。到達目標は日本語能力試験N2レベルとする。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
基礎日本語	神崎　道太郎	火曜日３・４限

授業内容：　①教室のことば、ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

テキスト：　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊第1課～第13課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初級Ⅱ	神崎道太郎(火)・今井多衣子(木)	火曜日2限・木曜日2限

授業内容：　初級前半の学習半ばの学習者に対し、継続して初級の日本語学習を行う。初級の基本的な文型、文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊第14課～第25課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
初級Ⅳ	神崎道太郎(火)・今井多衣子(木)	火曜日１限・木曜日１限

授業内容：　初級後半の学習半ばの学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級後半の基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅱ本冊第 36 課～第 50 課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
中級聴解・会話	大塚　薫	月曜日 2 限

授業内容：　留学生が主人公のマンガを通して日本人の季節感、現代日本の家族について理解を深める。また、それぞれの課で話題となっている内容について自国の文化と比較し、何名かで話し合い自分の意見を発表する能力を高めることを目標とする。

使用教材：『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』アルク

評価方法：　出席と課題・受講態度及び期末試験

2016 年度日本語総合コース
第 2 学期授業シラバス＜朝倉キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10 月第 1 週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。日本語未習者を対象とする「基礎日本語」、日本語既習者で中級レベルの学生を対象とした「初中級会話Ⅱ」、「初中級文法」、「中級聴解Ⅱ」、「中級会話Ⅱ」、「中級読解」、「中級漢字・語彙Ⅱ」、「高知文化事情」、中上級レベルの学生を対象とする「アカデミック日本語Ⅱ」を設ける。

Ⅱ. 授業レベルについて

入門レベルは初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの 4 技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験 N2 レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験 N2 レベルの学生を対象とし、上級レベルへの 4 技能の実力アップを図り、到達目標は日本語能力試験 N1 レベルとする。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
基礎日本語	林翠芳(火)・池純子(水)・吉田鈴香(月・金)	月・火・水・金曜日２限

授業内容：　①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 1 課～第 25 課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初中級会話Ⅱ	大塚　薫	火曜日３限

授業内容：　留学生が主人公のマンガを通して日本人の季節感、現代日本の家族について理解を深める。また、それぞれの課で話題となっている内容について自国の文化と比較し、グループで話し合い発表の能力を高めることを目標とする。

使用教材：『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』アルク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
初中級文法	尾中　美代子	木曜日３限

授業内容：　初級文法の復習と、中級レベルに向けて様々な文法項目を取り上げる。会話レベルの向上につながる文法知識を学ぶ。
使用教材：　ハンドアウト
評価方法：　期末試験、課題・受講態度

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
中級聴解Ⅱ	林　翠芳	火曜日１限

授業内容：　会話場面におけるリスニング能力を高め、場面に応じて適切に話す能力を付けることを目標とする。
使用教材：　『聞いて覚える話し方　日本語生中継』中～上級編　くろしお出版
評価方法：　期末試験(発表)、出席、課題・受講態度

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
中級読解	神崎　道太郎	木曜日２限

授業内容：　中級レベルの学習者を対象とし、文章全体の構造を考えながら分析的に読む練習を行い、読む能力と語彙力の養成を目指す。
テキスト：　ハンドアウト
評価方法：　課題・受講態度及び出席

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
中級会話Ⅱ	尾中　美代子	木曜日４限

授業内容：　川柳にふれることで、日本語の拍感覚を身につける。日常の様々なトピックについて、自分の考えや意見を発言できる。主に、川柳、諺、格言・名言などの短い文を取り上げ、その文に込められた意味や感情などについて、グループで意見交換をし、発表する。
テキスト：　ハンドアウト
評価方法：　期末試験、課題・受講態度

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
中級漢字・語彙Ⅱ	池　純子	金曜日２限

授業内容：　中級(N2 程度)の漢字・語彙の習得を目指す。日常生活でよく使う漢字や語彙の定着を目的とする。漢字・語彙の小テストをしたり、学習した漢字や語彙を使った作文を宿題にしたりすることもある。
テキスト：　『語彙マップで覚える漢字と語彙』J リサーチ出版

『ペアで覚えるいろいろなことば』武蔵野書院
『新完全マスター漢字―日本語能力試験 N2』スリーエーネットワーク
評価方法：　期末試験、課題・受講態度・出席

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
高知文化事情	エバ・ガルシア	水曜日２限

授業内容：　土佐の伝統文化を体験しながら、自然環境や歴史的背景と文化の関係を考え、総括的に学習し理解を深める。
テキスト：　ハンドアウト
評価方法：　最終レポート、課題、出席・受講態度

授業科目	***担当講師名***	***曜日・時限***
アカデミック日本語Ⅱ	林 翠芳	月曜日２限

授業内容：大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。
テキスト：　『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』The Japan Times
『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times
評価方法：　最終発表、課題提出、出席・受講態度

2016 年度日本語総合コース
第 2 学期授業シラバス＜岡豊キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」「日本語中級」を週 1 コマずつ設け、2016 年 10 月第 1 週から 2017 年 2 月まで 15 週間開講する。

Ⅱ. 授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわれる内容とする。

「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの 4 技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験 N3 レベルとする。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時間*
日本語初級・日本事情	東條　美紀	木曜日５限

授業内容:　初級レベルの日本語を使ってコミュニケーションをとる楽しさを日本事情や相互文化理解をとおして学習する。
使用教材：　『日本語　これだけ！１』ココ出版
評価方法：　出席、課題、授業態度

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時間*
日本語中級	東條　美紀	火曜日５限

授業内容：　初級日本語文法をマスターし、中級前半レベルへの実力アップを図る。
使用教材：　『初級日本語文法総まとめ　ポイント 20』スリーエーネットワーク
評価方法：　出席、課題、授業態度

2016 年度日本語総合コース
第 2 学期授業シラバス＜物部キャンパス＞

Ⅰ. 授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10 月第 1 週から始まり、日本語未習者を対象とする「初級Ⅰ」、日本語入門を習得した学習者を対象とする「初級Ⅱ」、日本語初級前半を習得している学習者を対象とする「初級Ⅲ」、既習者で中級レベルの学生を対象とした「初中級聴解・会話」、2016 年に来日した学生を対象とする「日本事情」を設ける。「初級Ⅰ」、「初級Ⅲ」は週 2 コマ、「初級Ⅱ」、「初中級聴解・会話」、「日本事情」は週 1 コマである。

Ⅱ. 授業レベルについて

「初級Ⅰ」は初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語入門を習得している学生を、「初級Ⅲ」は日本語初級前半を習得している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N4 レベルとする。

「初中級聴解・会話」は、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの聴解・会話能力の向上を図る。到達目標は日本語能力試験 N3 レベルとする。

「日本事情」は、日本の生活に慣れていない学生を対象とし、高知県での生活環境に慣れ、今後生活していく上での様々な情報を習得し、地域の人々とも円満な関係を築けるようになることを目指す。

Ⅲ. クラス内容

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初級Ⅰ	神崎道太郎(火)・石川啓子(木)	火・木曜日 2 限

授業内容：　①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

使用教材：　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 1 課～第 13 課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク

評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初級Ⅱ	神崎道太郎	水曜日 3・4 限

授業内容：　初級前半の学習半ばの学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級前半の基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 14 課～第 25 課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初級Ⅲ	今井多衣子(火)・石川啓子(木)	火曜日 2 限・木曜日 3 限

授業内容：　初級前半を学習した学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級前半から後半にかけての基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。
使用教材：　『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』第 26 課～第 37 課　スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
評価方法：　期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
初中級聴解・会話	今井　多衣子	火曜日 1 限

授業内容：　日常的な日本語表現を聴き取り、適切な会話やスピーチができるようになる。
使用教材：　『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』第 38 課～第 50 課　スリーエーネットワーク
『やさしい日本語の聴解トレーニング』ナツメ社
『会話の授業を楽しくするコミュニケーションのためのクラス活動 40』
スリーエーネットワーク
評価方法：　期末試験(発表)、課題、授業への積極的態度

授業科目	*担当講師名*	*曜日・時限*
日本事情	今井多衣子・東條美紀	火曜日 3 限

授業内容：　高知県及び高知市、南国市での生活環境に慣れ、印象深い日本文化体験をする。
① オリエンテーション、自己紹介
② 伝統的な日本の食べ物の体験
③ 大学一日公開日の準備
④ 大学一日公開日「日本語カフェ」での日本語実習
⑤ 南国市の生活ガイドと災害に関する情報
⑥ 高知市へ行き、日本人と待ち合わせ
⑦ 日本の年間伝統行事と年賀状
⑧ 日本の正月体験
⑨ 日本事情の感想と各国事情との比較
使用教材：　ハンドアウト
評価方法：　課題、受講態度、出席

（５）高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式

①平成 28 年度第 1 回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を挙行

日時：平成 28 年 7 月 20 日

概要:平成 28 年度第 1 回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を挙行し、脇口学長から出席者 15 名一人一人へ助成金の決定通知書を交付しました。学長からは「この国際交流基金助成事業によって、本来の目的達成のための学びを優先していただきたい。そして、将来、地域や世界で活躍する際、どんな場面においても国際的な視野を持つグローカル人材が欠かせない存在となっていることを忘れないでほしい。」と、基金の有効な活用を期待するメッセージが送られました。

本年度は、「外国人留学生への奨学事業（一般型、新戦略型）」、「外国へ留学する学生への奨学事業」、「大学院生の研究発表を目的とする海外派遣事業」の3件の事業において、多くの申請の中から合計21名（うちH27年度からの継続 1 件）を採択しました。

②平成 28 年度第 2 回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を挙行

日時：平成 28 年 12 月 7 日

概要：平成 28 年度第 2 回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を挙行し、脇口学長から「外国へ留学する学生への奨学事業」採択者 6 名のうち出席者 4 名一人一人へ助成金の交付決定通知書を交付しました。学長からは「この国際交流基金助成事業によって、少なくとも目的は 1 つ持ち、書物に書かれていないような体験的な学びの成果を得て将来ご自身の武器として下さい。帰国後は海外で得た知識や経験を友人や後輩などへ伝えてほしい。」と基金の有効的な活用を期待するメッセージが送られました。

（6）新入留学生オリエンテーション

日時：第 1 学期：平成 28 年 4 月 1 日、4 月 5 日
　　第 2 学期：平成 28 年 9 月 28 日、10 月 5 日

概要：

新入留学生オリエンテーションを第 1 学期は、4 月 1 日と 4 月 5 日、第 2 学期は 9 月 28 日と 10 月 5 日に開催しました。各回の内容は下表のとおりです。第 2 学期には第 1 回オリエンテーション後にミニウェルカムパーティーを開催し、1 学期から入学している留学生や日本人学生と情報交換するなど懇親を深めました。

平成 28 年度第 1 学期	平成 28 年度第 2 学期
第 1 回（平成 28 年 4 月 1 日）	第 1 回（平成 28 年 9 月 28 日）
○国際連携推進センター長挨拶 ○高知大学生活協同組合からの案内 ○高知大学留学生を支援する会の紹介 ○留学生活についての諸注意 ○銀行口座開設手続き※希望者のみ	○国際交流課スタッフ紹介 ○留学生活についての諸注意 ○学生教育研究災害傷害保険の加入 ○銀行口座開設手続き※希望者のみ ○防災講演: 高知大学防災すけっと隊 ○国際交流サークル「国際茶屋」紹介 ○えんむすび隊からのお知らせ
第 2 回（平成 28 年 4 月 5 日）	第 2 回（平成 28 年 10 月 5 日）
○国際連携推進センター教員紹介 ○国際交流課スタッフ紹介 ○えんむすび隊からのお知らせ ○防災講演: 高知大学防災すけっと隊 ○国際交流サークル「国際茶屋」紹介 ○保健管理センターからのお知らせ ○防犯・交通マナー教室：高知南警察署	○国際連携推進センター教員紹介 ○保健管理センターからのお知らせ ○高知大学生活協同組合からの案内 ○高知大学留学生を支援する会の紹介 ○防犯・交通マナー教室：高知南警察署 追加説明（平成 28 年 10 月 19 日） ○全学認証 ID・パスワード取扱い諸注意

（7）帰国準備説明会

日時：第 1 学期：平成 28 年 7 月 27 日
　　第 2 学期：平成 29 年 1 月 25 日

概要：平成 27 年度第 2 学期より、留学期間を終えて帰国する交換留学生を対象として帰国準備説明会を開催しています。平成 28 年度は、学期末テストが始まる前の平成 28 年 7 月 27 日と、平成 29 年 1 月 25 日に実施しました。

国際交流課担当職員から、学内手続き関係（帰国日時の連絡、帰国後の連絡先、貸出物の返却など）、市役所での手続き（住民票転出届及び国民健康保険証の返却）、銀行等での手続き（銀行（郵便局）口座の解約）、住居の手続き（宿舎等退去手続き、部屋の点検、家賃支払い、電気・ガス・水道代・インターネットの解約と支払い、部屋の片づけ、ゴミの分別・処分）、携帯電話の解約、在留カードの返還など、帰国前に留意しておいてほしいことについて、丁寧に説明を行いました。また、今後の留学生支援に活かすため、修学や生活上の良かったことや困ったことなどについてアンケートを実施しました。

最後に国際交流課から、留学終了後も帰国留学生ネットワークの活動やホームページ、Facebook などを通じて、高知大学とのつながりを継続してほしいと伝えました。

（８）海外留学説明会

①第 1 回海外留学説明会

日時：平成 28 年 4 月 27 日

概要：新入生と 2 年生を対象とした初級編として行い、約 80 名の参加がありました。

第一部は、新納国際連携推進センター長から、大学生のうちに海外経験をすることの意義や、関心を欧米だけでなくアジアへ向けることの重要性について話がありました。次に、本年 3 月に KAKEHASHI プロジェクトで米国シアトルに派遣され、現地の大学生や小学生等と交流した学生から、その経験から学んだことの発表がありました。その後、国際交流課の交換留学担当者による海外留学の基本情報と留学計画の立て方についての説明がありました。

第二部は、本学でもIELTS対策講座を行っている英語教育コンサルタントの塚本亮氏を講師に招き、「グローバル時代の学びかた、働きかた」と題したセミナーを行いました。参加した学生からは、「将来を考えるきっかけになった」「英語を勉強するモチベーションにつながった」との感想がありました。最後にIELTS受験情報として、日本英語検定協会の方からIELTS試験の概要や留学に際しての有用性などを説明していただきました。

②第 2 回海外留学説明会

日時：平成28年6月29日

概要：約60名の学生が参加し、はじめに国際交流課職員による海外留学の基本情報と交換留学の申請方法について説明があった後、「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」に採用されてスウェーデンのイェーテボリ大学に留学していた人文学部4年の中村季世さんから留学生活や現地での活動について発表がありました。次に、イェーテボリ大学文学部の永野マドセン泰子教授から、イェーテボリ大学の紹介と、自身の海外経験について講演がありました。その後、国際連携推進センター副センター長の是永かな子准教授とイェーテボリ大学から交換留学中のアンドレ・アンデショーンさんも加わって、スウェーデンと日本の違いや、留学をしてみて一番驚いたことなどをざっくばらんに話しました。

別会場において協定校ごとにブースを分けて行った個別留学相談会には、米国のロードアイランド大学から来日中の教員も相談員として加わり、参加者にとってはより深く協定校を知ることのできる機会となりました。

③第 3 回海外留学説明会

日時：平成28年11月30日

概要：インターナショナルデイのイベントの1つとして第3回海外留学説明会が開催されました。学生約20名の参加があり、留学経験のある学生が中心となって準備、運営を行った。現在アメリカ、オランダ、スウェーデンに交換留学中の学生とWebビデオ会議サービスを介してリアルタイムで質問ができる“Online Meet-up”を初めて行いました。留学前にやっておいた方がよかったことのアドバイスや今留学している大学のおすすめポイントなどが聞け、参加者からは好評でした。

④第4回海外留学説明会

日時：平成29年1月18日、1月20日

概要：両日で約30名の参加者があり、1月18日は、「トビタテ！留学JAPAN説明会・報告会」として、はじめに国際交流課職員によるトビタテ！留学JAPAN第7期応募について説明があった後、参加学生同士で大学卒業後になりたい理想像や海外に興味を持つきっかけなどを話し合うことで、留学の目的を明確にするミニワークショップを行いました。その後、第3期生として採用された人文学部4年の中村季世さん、第4期生として採用された農学部4年の久保穂波さんが自身の海外滞在経験を報告しました。2人の発表を聞いた脇口学長からは、「それぞれが日本では得られない経験をし、成長して帰ってきた。ここにいるみなさんにはぜひ留学という夢を実現してもらいたいが、周

りの友人に今日2人から聞いた話をすることで、留学に行けない学生にも2人の貴重な経験を共有してほしい」という話がありました。報告会終了後も、熱心に2人に質問をする参加者が多く、トビタテ！留学JAPAN応募への意欲をのぞかせていました。

「トビタテ！留学JAPAN説明会・報告会」の様子

1月20日は、「海外渡航危機管理セミナー」を行いました。今回はこれまでより時間を長くとり、医学部医療学（環境医学）講座教授でもある菅沼成文国際連携担当副学長が、海外渡航時に注意すべき感染症の種類とその対策方法について講演を行いました。また、ジェイアイ傷害火災保険株式会社より城戸克斉氏を講師に招き、国・地域別に注意すべきトラブルのポイントや海外滞在における心構えについて話していただきました。参加者の1人で2月から交換留学予定の学生からは、「知らなかったことが聞けてよかった。自分の行く国について勉強不足だということを痛感した」という声が聞かれるなど、留学・海外渡航を直前に控えた参加者にとっては、改めて気を引き締める機会となりました。

「海外渡航危機管理セミナー」の様子

（９）進学説明会

①ジーベック 2016 年外国人留学生相談会

日時：平成 28 年 7 月 6 日

概要：国公立大学 6 校（本学の他、岡山大学・香川大学・大阪教育大学・県立広島大学・神戸外国語大学)、私立大学 16 校（山陽学園大学・就実大学・広島経済大学・広島国際学院大学・四国大学・天理大学・龍谷大学・大阪経済法科大学・愛知大学・大阪産業大学・神戸医療福祉大学・神戸山手大学・今治明徳短期大学・白鳳短期大学・京都西山短期大学・香川短期大学)、専門学校 13 校が集まり、外国人留学生のための進学相談会が岡山で行われた。

各大学のブースにて留学に関する個別相談が行われ、高知大学のブースには 19 名の学生が訪れた。19 名とも学部志望者であり、工学、経済・経営に関する質問が多かった。また、地元の岡山外語学院及び岡山ビジネスカレッジからは毎年本学を受験する学生がおり、本学への受験を真剣に考えている学生が多い傾向があった。

②ジーベック 2016 年外国人留学生相談会、日本語学校訪問

日時：平成 28 年 7 月 7 日

概要：国立大学 4 校（本学の他、香川大学・県立広島大学・神戸外国語大学)、私立大学 8 校（高松大学・四国大学・山陽学園大学・天理大学・大阪産業大学・香川短期大学・今治明徳短期大学・白鳳短期大学・)、専門学校 3 校が集まり、外国人留学生のための進学フェアが高松で行われた。

当日の全体の参加人数は 130 名で、各大学のブースにて留学に関する個別相談が行われ、高知大学のブースには 19 名の学生が訪れた。学部志望者が 17 名、大学院志望者が 2 名で、経済・経営、情報科学に関する質問が多かった。地元の日本語学校は、ネパールやベトナムの留学生が 7 割を占め、大学や大学院に進学できるレベルには一部の留学生しか達しないとのことだった。

また、穴吹ビジネスカレッジ日本語学科を訪問し、教務部長畑ゆかり先生にご対応いただいた。留学生の進学指導に関する意見交換とともに、高知大学の紹介、そして穴吹ビジネスカレッジ日本語学科の様子、留学生の特徴等についてご紹介いただいた。

③JASSO外国人学生のための進学説明会（東京）

日時：平成28年7月10日

概要：池袋サンシャインシティ文化会館展示ホールにて 180 機関が参加した標記説明会にて本学のブースを構え、10 時から 16 時の 6 時間、来場した進学希望者に対して説明を行いました。当日の全体の参加人数は 2,669 名で、本学のブースに訪れたのは、日本語学校教員数名も含めて合計 47 名でした。うち、大学院への進学希望者が 10 名ほどおり、また学部でも編入を希望する者など、志望課程は多様でした。希望専攻・学部は人文社会科学が多く、中でも経営・経済分野など、就職に生かせる実用的な学問を学びたいという学生が多く、理工学部志望者も数名おり、来年度の募集要項が出来上がり次第送付することとなりました。国籍は大半が中国で、その他は、タイ、ベトナム、モンゴル、マレーシアが各 3 名、韓国が 1 名でした。

　ブースに訪れた学生からは、入試の際に必要な条件・科目、また、授業料・奨学金・住居・高知での生活費など、経済的な面に関しての質問を多く受けました。

④JASSO外国人学生のための進学説明会（大阪）

日時：平成28年7月16日

概要：梅田スカイビル　アウラホール及びステラホールにて開催された「JASSO 外国人学生のための進学説明会（大阪）」に参加し、高知大学進学希望者や進学指導担当等の学校関係者を対象に、高知大学の教育、研究上の特色等に関する情報を提供し、高知大学への進学の推進を図りました。

　当日の全体の参加人数は 1633 名で、本学のブースに訪れたのは、日本語学校教員数名も含めて合計 28 名でした。今年度は心理学、物理、生物、ソフトウエア、建築、工学、医学、薬学、語学、経営学等の多専門領域に関する問い合わせがありました。また、進学指導担当等の学校関係者からは、日本留学試験の基礎科目の配分や合格の点数の目安が知りたい等の要望がありました。

⑤日本留学説明会・フェア2016(モンゴル)

日時：平成28年10月8日、10月9日

概要：モンゴルからの留学生受け入れ促進のために日本留学説明会・フェア2016に新納国際連携推進センター長ほか1名が参加し、大学紹介プレゼンテーション及び個別相談を行いました。モンゴルでは日本留学が大変人気で、フェアへの参加者は2日間で1,233名、高知大学ブースへの来場者は両日で109名に上りました。希望分野は人・教・理・医・農の全分野にわたっており、特に経済・経営・工学の分野への希望が多くありました。

日本留学フェア開催前の6日・7日には、JICAモンゴル事務所、新モンゴル学園、モンゴル科学技術大学及びモンゴル国立大学を訪問し、情報収集を行いました。新モンゴル学園は、日本の学校のカリキュラムをモデルにして2000年10月に設立された小中高一貫校で、現在は新モンゴル工科大学、高専も併設しています。新モンゴル高校からはこれまで本学に5名が正規生として留学し、今年も数名の生徒が受験を考えてくれているとのことでした。

さらに、本学で過去3年間にわたって実施したJICA課題別研修「へき地教育の振興」のモンゴルから参加した過去の研修員と、帰国後のフォローアップ面談を行いました。モンゴル国立教育研究所職員ら5名が集まり、同研修中に訪れた県内の小学校で学んだ指導案や複式学級指導法などが実際のモンゴルの教育現場に活かされているとのことでした。

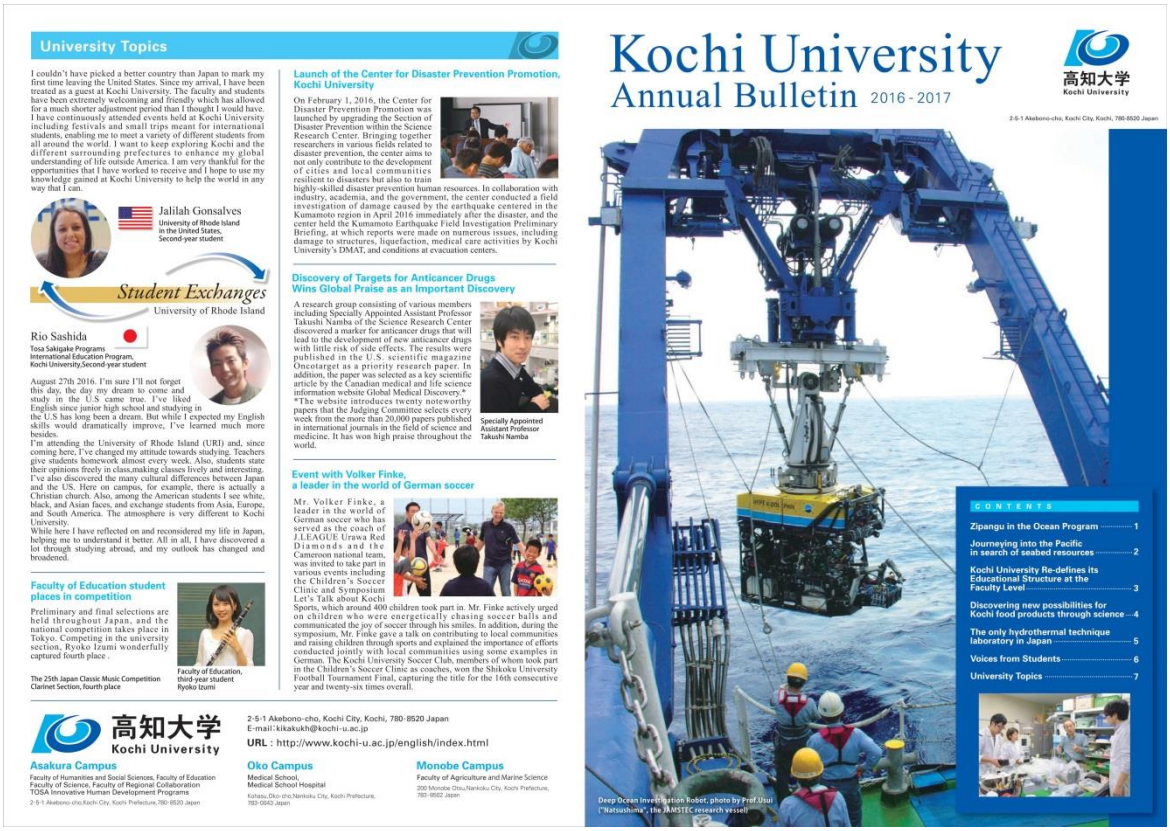
現在、本学には4名のモンゴル人留学生（正規学生）が在籍しています。今後もますますモンゴルとの交流を深めていけるよう、新モンゴル高校やJICAモンゴル・日本語センター等との連携強化を図っていきたいと考えています。

（１０）　留学パンフレット（英語）、**Annual Bulletin**（英語）、
高知大学国際交流**HP**、**Facebook**

留学パンフレット（英語）
国際連携推進センター発行広報誌
http://www.kochi-u.ac.jp/international/brochure/

Annual Bulletin（英語） 2016-2017

国際連携推進センター発行広報誌



University Topics

I couldn't have picked a better country than Japan to mark my first time leaving the United States. Since my arrival, I have been treated as a guest at Kochi University. The faculty and students have been extremely welcoming and friendly which has allowed for a much shorter adjustment period than I thought I would have. I have continuously attended events held at Kochi University including festivals and small trips meant for international students, enabling me to meet a variety of different students from all around the world. I want to keep exploring Kochi and the different surrounding prefectures to enhance my global understanding of life outside America. I am very thankful for the opportunities that I have worked to receive and I hope to use my knowledge gained at Kochi University to help the world in any way that I can.

Jalilah Gonsalves
University of Rhode Island in the United States, Second-year student

Student Exchanges
University of Rhode Island

Rio Sashida
Tosa Sakigake Programs International Education Program, Kochi University,Second-year student

August 27th 2016. I'm sure I'll not forget this day, the day my dream to come and study in the U.S came true. I've liked English since junior high school and studying in the U.S has long been a dream. But while I expected my English skills would dramatically improve, I've learned much more besides.
I'm attending the University of Rhode Island (URI) and, since coming here, I've changed my attitude towards studying. Teachers give students homework almost every week. Also, students state their opinions freely in class,making classes lively and interesting. I've also discovered the many cultural differences between Japan and the US. Here on campus, for example, there is actually a Christian church. Also, among the American students I see white, black, and Asian faces, and exchange students from Asia, Europe, and South America. The atmosphere is very different to Kochi University.
While here I have reflected on and reconsidered my life in Japan, helping me to understand it better. All in all, I have discovered a lot through studying abroad, and my outlook has changed and broadened.

Faculty of Education student places in competition

Preliminary and final selections are held throughout Japan, and the national competition takes place in Tokyo. Competing in the university section, Ryoko Izumi wonderfully captured fourth place .

The 25th Japan Classic Music Competition Clarinet Section, fourth place

Faculty of Education, third-year student Ryoko Izumi

Launch of the Center for Disaster Prevention Promotion, Kochi University

On February 1, 2016, the Center for Disaster Prevention Promotion was launched by upgrading the Section of Disaster Prevention within the Science Research Center. Bringing together researchers in various fields related to disaster prevention, the center aims to not only contribute to the development of cities and local communities resilient to disasters but also to train highly-skilled disaster prevention human resources. In collaboration with industry, academia, and the government, the center conducted a field investigation of damage caused by the earthquake centered in the Kumamoto region in April 2016 immediately after the disaster, and the center held the Kumamoto Earthquake Field Investigation Preliminary Briefing, at which reports were made on numerous issues, including damage to structures, liquefaction, medical care activities by Kochi University's DMAT, and conditions at evacuation centers.

Discovery of Targets for Anticancer Drugs Wins Global Praise as an Important Discovery

A research group consisting of various members including Specially Appointed Assistant Professor Takushi Namba of the Science Research Center discovered a marker for anticancer drugs that will lead to the development of new anticancer drugs with little risk of side effects. The results were published in the U.S. scientific magazine Oncotarget as a priority research paper. In addition, the paper was selected as a key scientific article by the Canadian medical and life science information website Global Medical Discovery.*
*The website introduces twenty noteworthy papers that the Judging Committee selects every week from the more than 20,000 papers published in international journals in the field of science and medicine. It has won high praise throughout the world.

Specially Appointed Assistant Professor Takushi Namba

Event with Volker Finke, a leader in the world of German soccer

Mr. Volker Finke, a leader in the world of German soccer who has served as the coach of J.LEAGUE Urawa Red Diamonds and the Cameroon national team, was invited to take part in various events including the Children's Soccer Clinic and Symposium Let's Talk about Kochi Sports, which around 400 children took part in. Mr. Finke actively urged on children who were energetically chasing soccer balls and communicated the joy of soccer through his smiles. In addition, during the symposium, Mr. Finke gave a talk on contributing to local communities and raising children through sports and explained the importance of efforts conducted jointly with local communities using some examples in German. The Kochi University Soccer Club, members of whom took part in the Children's Soccer Clinic as coaches, won the Shikoku University Football Tournament Final, capturing the title for the 16th consecutive year and twenty-six times overall.

高知大学 Kochi University

2-5-1 Akebono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan
E-mail:kikakukh@kochi-u.ac.jp
URL : http://www.kochi-u.ac.jp/english/index.html

Asakura Campus
Faculty of Humanities and Social Sciences, Faculty of Education
Faculty of Science, Faculty of Regional Collaboration
TOSA Innovative Human Development Programs
2-5-1 Akebono-cho,Kochi City, Kochi Prefecture,780-8520 Japan

Oko Campus
Medical School,
Medical School Hospital
Kohasu,Oko-cho,Nankoku City, Kochi Prefecture, 783-0043 Japan

Monobe Campus
Faculty of Agriculture and Marine Science
200 Monobe Otsu,Nankoku City, Kochi Prefecture, 783-8502 Japan

Kochi University
Annual Bulletin 2016 - 2017

高知大学 Kochi University

2-5-1 Akebono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan

CONTENTS

Zipangu in the Ocean Program 1
Journeying into the Pacific in search of seabed resources 2
Kochi University Re-defines its Educational Structure at the Faculty Level 3
Discovering new possibilities for Kochi food products through science 4
The only hydrothermal technique laboratory in Japan 5
Voices from Students 6
University Topics 7

Deep Ocean Investigation Robot, photo by Prof.Usui ("Natsushima", the JAMSTEC research vessel)

Seeking the Wealth of Mineral Resources in Our Seas

Council for Science, Technology and Innovation, Cabinet Office
Cross-ministerial Strategic Innovation Promotion Program,
Next-generation Technology for Ocean Resources Exploration

Zipangu in the Ocean Program

Three of Kochi University's proposals for commissioned research selected

Of the six selected proposals for research being commissioned for the Next-Generation Technology for Ocean Resources Exploration Program, which is being promoted by the Japanese government and commonly referred to as the "Zipangu in the Ocean Program", three were submitted by Kochi University. Only Kochi University achieved the remarkable feat of having three of its proposals selected.
The Zipangu in the Ocean Program project targets seabed mineral resources in the oceans around Japan. It consists of a series of steps that are necessary for seabed development, and is expected to be established by the 2018 fiscal year. There steps are (1) scientifically ascertaining how seabed mineral resources come about and grow, (2) developing technical and research methods required for seabed exploration, and (3) conducting an environmental impact report for seabed resource excavation.
"Having attracted various researchers including Professor Usui, the leading figure in Japan in the field of manganese deposit research, Kochi University is now the leading center for seabed resource research and technology in Japan".

In the 2016 academic year, the Marine Resources and Environmental Course was launched by Kochi University.
"Students who take this course receive education in the leading science involved in seabed resource research.
There is also growing expectation that this will lead to the development of industry in Kochi. Companies within or without Kochi are taking part in the joint development and operation of equipment used for seabed resource exploration.
"The goal is to generate 2.0 billion yen in revenue from the sale and operation of equipment. Furthermore, it is expected that the development of these industries will provide employment opportunities for students."
The research abilities of Kochi University may dramatically transform the future of Japan and Kochi.
*Zipangu is a name for Japan that was used in the accounts of the travels of Marco Polo. It was thought to be fabulously rich in silver and gold and owing the possibility to access precious ores.

Selected research topic 01

Creating physical science and biological observation technology that contributes to the investigation of the scale and quality of blind hydrothermal mineral deposits

Faculty of Agriculture and Marine Science, Professor Kei Okamura

Hydrothermal mineral deposits are found at locations where there is venting of hot hydrothermal fluids containing minerals such as gold and silver. These minerals then precipitate in the surrounding area. In order to ascertain the size of these deposits, we are developing equipment to measure underground flows in hydrothermal areas. We will be able to install equipment such as sensors and water pressure gauges and make measurements by piercing the seabed.

Selected research topic 02

Earth science research on the diversity of seabed manganese deposits that include rare metals

Center for Advanced Marine Core Research, Specially Appointed Professor Akira Usui

Seabed manganese deposits that contain rare earth metals such as cobalt, nickel, and platinum can be found here and there in the ocean around Japan. We are examining how they are distributed by actually going to where they are; and by bringing back samples, we can examine when they formed, how they grow now, and where they are.

Selected research topic 03

Clarifying hydrothermal chemical reactions in order to construct deposit models

Faculty of Agriculture and Marine Science, Associate Professor Takuroh Noguchi

This is research on clarifying the physical conditions under which precious metals such as gold and silver contained in hydrothermal fluids precipitate, forming hydrothermal mineral deposits. The research is being conducted jointly with Kyushu University. In fact, we observe fine hot water streams and the environment in the Okinawa Trough, which possess hydrothermal mineral deposits.

Journeying into the Pacific in search of seabed resources

Geology of seabed resources

Labo Report

Professor Usui, your field is the geology of seabed resources. What type of research do you conduct?

Usui: The seabed is drawing attention as a potential future resource, but the resources it contains are not well understood. The main objective of my research is to clarify the environment in which they form and the formation process using a marine geology approach, mineralogy approach, and earth science approach.

How do you conduct that research?

Usui: The research begins when you head out to sea. We submit research proposals to national organizations such as the Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology (JAMSTEC) and Japan Oil, Gas and Metals National Corporation (JOGMEC). And if the proposal is selected, we get a place on the marine resource research vessel. We head out into the Pacific, extract rock, which includes rare metals, from the seabed, bring the rocks back to the lab, look at them under the microscope and analyze their composition, and engage in various other activities.

Mr. Nishi, you are in the doctorate program. What was your motivation for joining the Usui lab?

Nishi: Before entering the university, I took part in an open campus event, and at that time, I learned that a lot of marine research was being conducted, which sparked my interest. The university has incredible facilities and equipment, including the Center for Advanced Marine Core Research. Through my studies after entering the university, I confirmed my strong desire to conduct marine research and so joined the lab. I also had a strong desire to conduct research on the research vessel. I have already done researchs on the vessel a total of eight times.
Usui:Sometimes proposals are accepted, and sometimes they are not. During the 2015 financial year, my proposal was selected, and in December three students went on the ship.

'Natsushima', Photo by Prof.Usui, the JAMSTEC research vessel

I truly believe that it will be useful to humanity in the future.

Professor
Science Research Center, Specially appointed professor
Akira Usui

I have already traveled on the marine resource research vessel eight times.

"Kaiko", Deep Ocean Investigation Robot, photo by Prof. Usui

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Studies in Applied Science, Second-year student
Keisuke Nishi
Student

Ocean voyages sound interesting

Nishi: It is really enjoyable because short voyages are about two weeks, and long ones can be about a month. At first, I went off the coast of Shikoku, but I now often travel all the way to the Pacific plate which is located at the most eastern part of Japan, around Minami-torishima.
Usui: The time on the vessel is very stimulating because there are extremely talented researchers in different fields and of various ages on the vessel. Furthermore, overcoming the hurdles to work collaboratively creates a sense of solidarity.
Nishi: I, too, have seen raw samples and had discussions with other researchers on the vessel, which is my favorite aspect of the work.
Usui: As for exchanges with other researchers, there are, in fact, researchers in various fields related to the ocean at Kochi University.

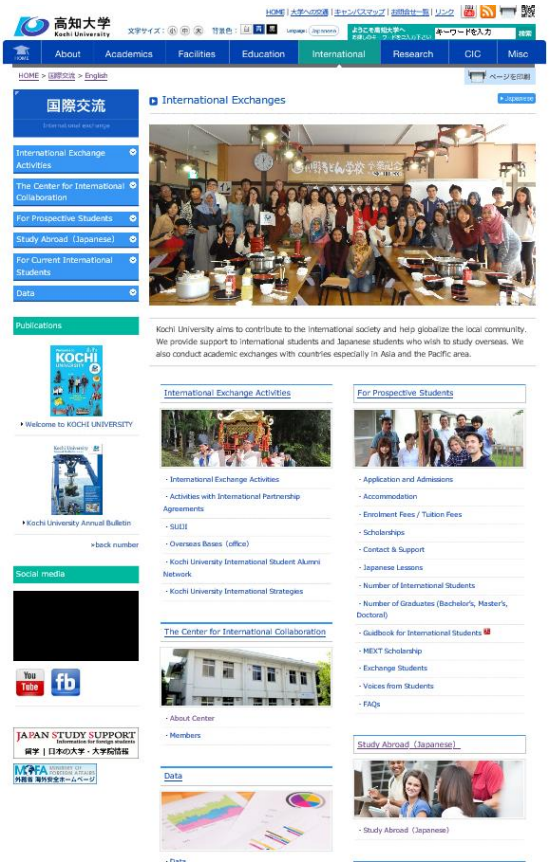
It seems that the marine research being conducted at Kochi University will draw more attention in the future.

Nishi: Kochi University is the only university where it is possible to conduct research on manganese, and I am really glad that I came here. It would be great if I could use what I learn in this lab to find work related to marine exploration in the future.
Usui: I worked at a research institute of the then Ministry of International Trade and Industry for many years, but I always thought that I wanted to conduct marine research. If I such a chance, I wanted to do it at Kochi University, which has the best facilities in Japan. With that idea in mind, my dream came true thirteen years ago. It is still my opinion that just as it was thirteen years ago, Kochi University is the best university for conducting marine research.

高知大学国際交流 HP

日本語版：
http://www.kochi-u.ac.jp/international/index.html

英語版：
http://www.kochi-u.ac.jp/international/english/index.html



Facebook　（高知大学　国際連携推進センター）

https://www.facebook.com/kochiuniversity.international/

4.会議関連

国際連携推進委員会名簿

留学生専門委員会名簿

国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

高知大学国際連携推進センター基本方針

国際連携推進委員会名簿

平成28年5月23日現在

部　局・職　名	氏　　名	任　期	備　　考
副学長（国際連携担当）	菅 沼 成 文		
国際連携推進センター長	新 納 宏		
大学教育創造センター長	小 島 郷 子		
学生総合支援センター長	岩 崎 貢 三		
総合研究センター長	大 西 浩 平		
地域連携推進センター長	受 田 浩 之		
国際連携推進センター副センター長	是 永 かな子		
国際連携推進センター国際プロジェクト部門長	柴 田 雄 介		
国際連携推進センター国際連携教育部門長	林 翠 芳		
人文学部選出教員	中 西 三 紀	28.4.1～30.3.31	
教育学部選出教員	松 原 史 典	28.4.1～30.3.31	
理学部選出教員	北 條 正 司	28.4.1～30.3.31	
医学部選出教員	小 林 道 也	28.4.1～30.3.31	
農学部選出教員	池 島 耕	28.4.1～30.3.31	
地域協働学部選出教員	湊 邦 生	27.4.1～29.3.31	
黒潮圏総合科学専攻選出教員	新 保 輝 幸	28.4.1～30.3.31	
センター連絡調整会議選出教員(国際連携推進センター長が兼務)	新 納 宏	28.4.1～30.3.31	
土佐さきがけプログラム選出教員	柴 田 雄 介	28.4.1～30.3.31	
研究国際部長	平 井 敏 彦		
その他委員長が必要と認めた者			
委員18名（定足数は2分の1以上：9名）			

高知大学国際連携推進委員会留学生専門委員会名簿

平成28年 5月1日現在

部　局・職　名	氏　　名	任　期	備　　考
国際連携推進センター長	新　納　　宏		
国際連携推進センター副センター長	是 永　か な 子		
国際連携推進センター国際プロジェクト部門長	柴　田　雄　介		
国際連携推進センター国際連携教育部門長	林　　翠　　芳		
国際連携推進センター専任担当教員	神 崎　道 太 郎		
国際連携推進センター専任担当教員	林　　翠　　芳		
国際連携推進センター専任担当教員	大　　塚　　薫		
国際連携推進センター専任担当教員	Eva Garcia del Saz		
人文社会科学部選出教員	中　西　三　紀	28.4.1～30.3.31	
教育学部選出教員	松　原　史　典	28.4.1～30.3.31	
理学部選出教員	米　村　俊　昭	28.4.1～30.3.31	
医学部選出教員	小　林　道　也	28.4.1～30.3.31	
農林海洋科学部選出教員	池　　島　　耕	28.4.1～30.3.31	
地域協働学部選出委員	大　槻　知　史	27.4.1～29.3.31	
黒潮圏総合科学専攻選出教員	久　保　田　賢	28.4.1～30.3.31	
土佐さきがけプログラム教員	柴　田　雄　介	27.4.1～29.3.31	
国際交流課長	永　野　秀　美		
学生支援課長	藤　澤　和　寛		
その他委員長が必要と認めた者			

委員18名（定足数12名）

平成28年7月13日

平成28年度国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

◎議　長	新納　　宏	センター長	第2条第1項
委　員	是永　かな子	副センター長	第2条第2項
委　員	柴田　雄介	国際ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部門長	第2条第3項
委　員	林　　翠芳	国際連携教育部門長	第2条第3項
委　員	平井　敏彦	研究国際部長	第2条第4項
委　員	菅沼　成文	副学長（国際連携担当）	第2条第5項

国際・地域連携センター改編検討タスクフォース
国際連携推進センター設置検討部会

平成 26 年 3 月 26 日

高知大学　国際連携推進センター基本方針

設置の経緯

国際連携推進センターは本学の各部局等と連絡の上、教育・研究交流、国際協力プロジェクト及び留学生の受入れ、本学学生の海外留学・派遣などを司る。本センターは、国際プロジェクト部門と国際連携教育部門から成り、中国語センターを附置する。

新センター設置にあたり、高知大学におけるこれまでの取組み【国際交流ポリシー（平成 18 年 4 月 12 日役員会決定）ならびに国際交流のあり方懇（平成 20 年 11 月 20 日）の報告】を踏まえて、国際連携推進センターの新しい基本方針を策定し、業務の方向性を示す。

国際連携推進センターの基本方針

１．グローカルな国際連携を目指す

高知県と同様の開発課題を抱えるアジア・大洋州等の開発途上国とのつながりを重視し、教育、研究、国際貢献の面で重点化を図っていく。地域と共に学び研究する「知の拠点」として、地域から世界に発信する大学を目指す。

２．双方向の国際交流を推進する

留学生の受入のみならず、本学学生の海外留学の促進に重点を置く。ワンストップサービスを強化し、海外からの優れた留学生受入れを増やす。日本人学生と留学生が集い、互いに学びあうキャンパスを創造する。

３．地球規模の課題に対する国際協力にチャレンジする

本学の研究シーズと高知県の地域資源の特徴を生かして、国際協力を推進する。国際協力の現場を教育・研究の場としても活用し、実践的で国際的な教育・研究を発展させる。

基本方針を具体化する活動

国際プロジェクト部門

１．国際連携の分野・地域を重点化する

（１）教育、研究、国際貢献すべての側面において都市部の有力大学、大規模大学との差別化をすすめ、高知大学にしかできない、あるいは高知大学が比較的優位にある教育研究分野を明確化し、海外へ発信していく。例えば、分野としては高知県の課題解決と直結する①実践的な農業及び食品加工、②海洋資源の利活用、③防災・気象変動・環境、④保健・医療、⑤学校教育、⑥地域の社会・経済開発などがあり得る。

（２）将来の教育・研究の国際的なネットワークを強化するため、留学生受け入れにあたっては、協定校はもとより、本学の重点地域である黒潮流域圏を含む東南アジア、特に若年人口が増大を続け、高等教育への需要の高い国々からも、将来性のある優秀な学位取得を目的とする留学生を積極的に受入れる。

２．国際交流拠点を中心に国際的な研究を推進する

（１）高知大学ならではの分野・地域における研究交流を促進するため、国際化戦略経費を重点配分し、外部資金を獲得できるよう支援する。配分にあたってはネットワーク型、文理融合型のプロジェクトを優先する。

（２）文理融合の研究交流や国際協力の促進を図るため、国際化戦略経費の一部をあてて、国・県の政策や計画とすり合わせて特定の研究テーマや対象地域を決め、関心ある研究者を公募して調査を行い、国際的な共同研究を発掘する。

３．国際協力に積極的にチャレンジする

（１）教員の研究成果を国際協力に生かし、ODA 資金による国際協力活動を活発化させる。特に JICA による途上国行政官向け国際研修は、直接途上国政府とのネットワークを強化し、海外事情に容易にアクセスできるため、積極的に開発・実施する。実施にあたっては、学生に国際協力を体験させるなど、教育面での活用も考慮する。

（２）国際協力活動は、国際貢献の面のみではなく、教育・研究に様々なメリットがあり、本学の目標の遂行に不可欠である。そのため、教職員の国際協力活動が正当に評価されるような仕組みを作る。

（３）国際協力事業を形成するにあたっては、国内においては高知県の自治体、企業、NGO との連携、また、海外においては協定校との協働も視野に入れて、ステークホルダー

を巻き込んだ案件に配慮する。このことによって、地域連携や協定校との連携がさらに促進される効果が期待できる。

国際連携教育部門

１．高知大学からの留学生派遣を増やす

（１）アジアの協定校からの留学生受入数に対し派遣数が少ないことから、アジアの英語共通語圏（フィリピン、マレイシアなど）の協定校への留学生派遣を増やす。また中国語圏の協定校への派遣を増やす。

（２）協定校への留学生派遣を増やすため、協定校情報の整理とパンフレット、イントラネットでの発信を強化、また学生向けセミナーを多重的に開催するなど、学生の関心を高める。

（３）留学希望者の英語力アップのため、学部等と共同で TOEFL 等対策講座の開発や支援を行うとともに、派遣数増加のために有効活用する。

（４）中国語センターを活用して、中国留学への学生や保護者の関心を高め、学生の中国語力をアップさせる。

２．日本人学生等と留学生が共に集い、共に学ぶキャンパスを創造する

（１）留学生向け行事は、日本人学生も参加可能とし、学生たち自身の企画を取り入れる。（例：日本語スピーチコンテスト、留学生による協定校紹介セミナー、学外への合同研修旅行など）

（２）高知大学ポータルサイトの国際関連部分は英語対応とし、学内のサインや看板も日・英 2 か国語併記とし、留学生に優しいキャンパスを実現する。

（３）日本人学生等と留学生が、常時集い情報交換できる交流スペースを確保する。交流スペースには、コンピューターや外国語雑誌、留学情報などがいつでも見られるよう整備し、留学生向けピジョンボックスを置く。

３．　留学生獲得から受入れまで、ワンストップサービスを強化する

（１）留学生の獲得に当たっては、協定校からの短期留学のみならず、質の確保を前提に JICA 留学生（修士）や私費留学生、国費留学生など長期留学生を積極的に獲得する。そのために国際連携推進センターは、留学生向けの広報ツール（外国語によるウェブサイト、パンフレット、DVD など）を開発し、国内のみならず海外での留学フェアに参加し海外大学での説明会などを開催する。また、学術交流等で海外の大学等へ出

張する際にも、留学生勧奨のための活動を行うことを促進する。（例：国際化戦略経費の申請項目にも留学生獲得努力を追加するなど）

（２）教員の留学生受入/派遣の事務的負担を減らし、留学生の利便性向上を図るため、留学生受入/派遣事務は、国際連携推進センターがワンストップサービスとしての役割を担う。また、教員向け及び留学生向けの受入手続マニュアル、留学希望者向けの留学マニュアル、留学生受入/派遣危機管理マニュアル等を整備しイントラネット、インターネットで公開する。

（３）留学生の危機予防のため、ブリーフィング、コンサルテーションを強化する。

（４）留学生向け宿舎確保は、混住型学生寮の整備を推進するが、当面は宿舎の借上げや宿舎提供サービスの外部委託などを検討する。

別紙

活動を可能とするための学内体制の整備（今後 1～2 年）

１．　国際連携推進センターに、プロジェクト形成や研究交流促進のために国際経験豊かな専任教員や事務職員を配置する。また、増大する業務に対応するため、国際連携推進センターが獲得した資金の中から、必要に応じて機動的に臨時スタッフを雇用して事務補助に当たらせる。留学生受入での宿舎手配などの定型業務は、可能な限り外部委託する。

２．　国際担当の専門人材を計画的に育成するため、事務職員の海外交流協定校への派遣等も含め研修プログラムを充実する。

３．　学術交流やプロジェクトの分野を絞り込み文理融合を進めるため、国際連携推進センターとして外部資金の獲得に努めるとともに、国際化のための戦略経費を増加する。国際化戦略経費は期限付きとし、あくまでも外部資金獲得の呼び水として使う。事業は毎年評価を行い、留学生獲得への貢献、外部資金獲得の努力等も評価項目に入れる。

４．　キャンパスでの国際交流促進のため、他の地方国立大学並みに増床し、各教員の研究室の他に留学生交流スペース、留学生カウンセリングルームを確保する。

５．　高知大学海外事務所の整理と機能強化を進める。優秀な留学生の獲得、学術交流や共同研究の促進、同窓会の組織化と支援、国際協力プロジェクトの形成などの機能をもたせる。そのために、教員の派遣を伴う海外事務所の設置を検討する。

６．　海外での留学生同窓会組織を育成・強化し、海外へ派遣する本学留学生や教員との親睦を深め、高知大学の最新情報、最新の研究成果の情報を提供する。同窓会ネットワークを活用して、本学の広報と留学生の募集への協力等を依頼する。

７．　学内各部局の国際連携を促進するために、全学的な国際戦略を明確化して外部公開するとともに、部局ごとの国際戦略策定を促進する。国際連携推進センターは全学的な国際戦略策定の事務局となるとともに各部局の策定を支援する。

８．センターには各部局からの兼務教員を置き、情報共有を促進する。

5.資料

海外協定校（大学間・部局間協定一覧表）

外国人留学生在籍（国別）

外部資金獲得状況

大学間協定一覧表（平成29年5月1日現在）

NO	相手機関名	国名・地域名	締結 年月日	内　容	中心部局
1	クイーンズランド大学	オーストラリア連邦	1980.10.01	学生交流	国際連携推進センター
			1980.11.07	学術交流	
2	佳木斯大学	中華人民共和国	1985.10.22	学術交流及び学生交流	医学部
3	カリフォルニア州立大学フレズノ校	アメリカ合衆国	1989.04.01	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
4	陝西科技大学	中華人民共和国	1994.07.26	学術交流及び学生交流	理工学部
5	揚州大学	中華人民共和国	1997.03.10	学術交流	農林海洋科学部
6	コンケン大学	タイ王国	1997.03.27	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
7	南ボヘミア大学	チェコ共和国	1999.06.23	学術交流及び学生交流	教育学部
8	チェコ科学アカデミー生物学センター	チェコ共和国	1999.06.24	学術交流	教育学部
9	カセサート大学	タイ王国	2000.05.01	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
10	安徽大学	中華人民共和国	2002.05.21	学術交流及び学生交流	教育学部
11	ハノイ科学工業大学	ベトナム社会主義共和国	2002.07.02	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
12	ハノイ科学大学	ベトナム社会主義共和国	2002.07.02	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
13	ブラビジャヤ大学	インドネシア共和国	2003.02.28	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
14	漢陽大学校	大韓民国	2003.06.26	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
15	韓瑞大学校	大韓民国	2003.07.23	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
16	国立ポリテクエ科大学 応用研究所，サルティジョ校	メキシコ合衆国	2003.09.08	学術交流及び学生交流	理工学部
17	サルティジョエ科大学	メキシコ合衆国	2003.09.09	学術交流及び学生交流	理工学部
18	チェンデラワシ大学	インドネシア共和国	2004.09.28	学術交流及び学生交流	医学部
19	瀋陽薬科大学	中華人民共和国	2005.05.12	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
20	フィリピン大学	フィリピン共和国	2005.11.24	学術交流及び学生交流	黒潮圏
21	ハノイ国立教育大学	ベトナム社会主義共和国	2006.01.06	学術交流	農林海洋科学部
22	イェーテボリ大学	スウェーデン王国	2006.02.27	学術交流及び学生交流	教育学部
23	ビコール大学	フィリピン共和国	2006.03.31	学術交流及び学生交流	黒潮圏
24	河南大学	中華人民共和国	2006.04.10	学術交流及び学生交流	教育学部
25	常州大学	中華人民共和国	2006.12.20	学術交流及び学生交流	理工学部
26	天津師範大学	中華人民共和国	2006.12.28	学術交流及び学生交流	教育学部
27	ボゴール農業大学	インドネシア共和国	2007.03.01	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
28	マレーシアプトラ大学	マレーシア	2007.05.18	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
29	国立中山大学	台湾	2007.05.14	学術交流及び学生交流	黒潮圏
30	東海大学	台湾	2007.10.18	学術交流及び学生交流	教育学部
31	スリウィジャヤ大学	インドネシア共和国	2008.03.11	学術交流	農林海洋科学部
32	金剛大学校	大韓民国	2008.12.09	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
33	南京航空航天大学	中華人民共和国	2009.11.12	学術交流及び学生交流	理工学部
34	マレーシアサラワク大学	マレーシア	2009.11.24	学術交流及び学生交流	黒潮圏
35	ハルオレオ大学	インドネシア共和国	2009.12.16	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
36	中国文化大学	台湾	2010.01.20	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
37	タンジュンプラ大学	インドネシア共和国	2010.02.01	学術交流及び学生交流	黒潮圏
38	白石大学校	大韓民国	2010.03.25	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
39	上海海洋大学	中華人民共和国	2010.10.15	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
40	南マットグロッソ連邦大学	ブラジル共和国	2012.03.13	学術交流	医学部
41	明知大学校	大韓民国	2013.01.03	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
42	チェンマイ大学	タイ王国	2013.02.12	学術交流	農林海洋科学部
43	サッサリ大学	イタリア	2013.02.21	学術交流及び学生交流	地域協働学部
44	国立慶尚大学校	大韓民国	2013.03.04	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
45	北京聯合大学	中華人民共和国	2013.03.11	学術交流及び学生交流	教育学部
46	アイルランド王立外科医学院バーレーン医科大学	バーレーン王国	2013.03.21	学術交流	医学部
47	北京外国語大学	中華人民共和国	2013.06.21	学術交流及び学生交流	教育学部
48	東国大学校	大韓民国	2013.07.03	学術交流及び学生交流	教育学部
49	タマサート大学	タイ王国	2013.08.20	学術交流及び学生交流	理工学部
50	国立東華大学	台湾	2013.08.27	学術交流及び学生交流	黒潮圏
51	アラビア湾岸諸国立大学	バーレーン王国	2014.02.13	学術交流	医学部
52	ハンゼ応用科学大学	オランダ	2015.03.09	学術交流及び学生交流	土佐さきがけプログラム
53	タイグエン大学	ベトナム社会主義共和国	2015.03.25	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
54	東北大学秦皇島分校	中華人民共和国	2015.04.15	学術交流及び学生交流	教育学部
55	ロードアイランド大学	アメリカ合衆国	2015.06.17	学術交流及び学生交流	土佐さきがけプログラム
56	ガーナ大学	ガーナ共和国	2015.09.09	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
57	インランドノルウェー応用科学大学	ノルウェー王国	2015.12.03	学術交流及び学生交流	教育学部
58	テキサス大学ダラス校	アメリカ合衆国	2016.02.04	学術交流	土佐さきがけプログラム

部局間協定一覧表（平成29年5月1日現在）

NO	大 学 名	国 名・地域名	締 結 年 月 日	内 容	担当部局
1	タイ　農林水産省水産庁	タイ王国	2001.11.26	学術交流	農林海洋科学部
2	首都医科大学口腔医学院	中華人民共和国	2004.10.28	学術交流	医学部
3	インドネシア科学技術省技術評価応用庁	インドネシア共和国	2006.11.28	学術交流	農林海洋科学部
4	釜山外国語大学校日本語大学	大韓民国	2007.03.08	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
5	韓国地質資源研究院石油海洋資源部	大韓民国	2007.08.08	学術交流	海洋コア
6	フィリピン農業省漁業・水産資源局第2地域支所	フィリピン共和国	2007.08.24	学術交流	黒潮圏
7	天津科技大学経済与管理学院	中華人民共和国	2008.04.04	学術交流	人文社会科学部
8	ロモノソプ初等中等高等学校	ベトナム社会主義共和国	2008.12.01	学術交流	教育学部
9	中国科学院地球環境研究所	中華人民共和国	2009.09.29	学術交流	海洋コア
10	パドバ大学理工学部	イタリア	2010.01.20	学術交流	理工学部
11	ハワイ大学医学部	アメリカ合衆国	2010.02.10	学術交流	医学部
12	モナッシュ大学サステナブルケミカルマニュファクチャリングセンター	オーストラリア連邦	2010.08.09	学術交流	理工学部
13	スウェーデン王国オィレショー特別学校	スウェーデン王国	2011.02.15	学術交流	教育学部
14	浙江大学生物系統工程及び食品科学学院	中華人民共和国	2011.04.18	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
15	国立台湾大学医学部	台湾	2011.10.11	学術交流及び学生交流	医学部
16	モンゴル・ロシア共同学校	モンゴル国	2012.06.05	学術交流及び学生交流	教育学部
17	中国地質大学資源学院	中華人民共和国	2012.08.14	学術交流	理工学部
18	シェレバングラ農科大学	バングラデシュ	2012.10.08	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
19	カリヤニ大学	インド	2012.10.10	学術交流	総合研究センター
20	韓国中央大学赤十字看護学部	大韓民国	2014.02.21	学術交流	医学部
21	リア外国語大学	インドネシア共和国	2014.06.30	学術交流及び学生交流	教育学部
22	ユバスキュラ大学教育学部	フィンランド共和国	2015.12.10	学術交流及び学生交流	教育学部
23	パレストラ体育スポーツ大学	チェコ共和国	2016.01.26	学術交流及び学生交流	教育学部
24	メトロポリタン大学社会科学教育学部学校学習研究所	デンマーク王国	2016.08.15	学術交流及び学生交流	教育学部
25	高雄大学人文社会科学部	台湾	2016.09.21	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
26	オーフス大学教養学部	デンマーク王国	2016.09.22	学術交流	教育学部
27	開南大学	台湾	2016.11.29	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
28	北京語言大学	中華人民共和国	2016.12.19	学術交流及び学生交流	人文社会科学部

高知大学外国人留学生在籍状況　　H29.05.01現在

国名・地域名	項目	国費 学部 男	国費 学部 女	国費 修士 男	国費 修士 女	国費 博士 男	国費 博士 女	国費 研究生等 男	国費 研究生等 女	国費 小計	私費 学部 男	私費 学部 女	私費 修士 男	私費 修士 女	私費 博士 男	私費 博士 女	私費 研究生等 男	私費 研究生等 女	私費 小計	計 男	計 女	合計
アジア	インド												1						1	1		1
	インドネシア						1			1					1	1	1	4	7	2	6	8
	韓国										5	2		1			5		13	10	3	13
	カンボジア							1		1										1		1
	タイ						1			1											1	1
	台湾											1	1					3	5	1	4	5
	中国			1		2	1			4	13	5	2	1	1		4	20	46	23	27	50
	ネパール										3	1	1	1	1				7	5	2	7
	バングラデシュ			1		4				5			1			1			2	6	1	7
	フィリピン					4	3			7										4	3	7
	ベトナム										1	2	2		2	1			8	5	3	8
	マレーシア					1				1		2				1			3	1	3	4
	ミャンマー														1				1	1		1
	モンゴル										1	3							4	1	3	4
北米	アメリカ																	2	2		2	2
南米	アルゼンチン					1				1										1		1
ヨーロッパ	ウクライナ			1						1										1		1
	オランダ																1		1	1		1
	スウェーデン																1	2	3	1	2	3
	ロシア				1					1											1	1
アフリカ	エチオピア							1		1										1		1
	ガーナ					1				1										1		1
	コンゴ民主共和国														1	1			2	1	1	2
総計				3	1	13	6	2		25	23	16	8	3	7	5	12	31	105	68	62	130
学部	人文学部/人文社会科学部										7	6					5	4	22	12	10	22
	教育学部							1		1	1	1					5	14	21	7	15	22
	理学部/理工学部										8	2						3	13	8	5	13
	農学部/農林海洋科学部										3	4							7	3	4	7
	地域協働学部																	1	1		1	1
	土佐さきがけプログラム										4	3					1	2	10	5	5	10
大学院総合人間自然科学研究科	人文社会科学専攻				1					1			2	1					3	2	2	4
	教育学専攻			1						1								2	2	1	2	3
	理学専攻			1						1										1		1
	医科学専攻							1		1			1	1					2	2	1	3
	医学専攻					1				1					2	2			4	3	2	5
	農学専攻			1						1			5	1			1	4	11	7	5	12
	黒潮圏総合科学専攻					5	3			8					4	1			5	9	4	13
愛媛大学大学院連合農学研究科						7	3			10					1	2		1	4	8	6	14
総計				3	1	13	6	2		25	23	16	8	3	7	5	12	31	105	68	62	130

外部資金　申請採択状況

申請年度	機関名	事業名	申請年月	申請件数		採択件数	採択金額
平成29年度	(独)日本学術振興会	外国人特別研究員(一般) 平成29年度第2回	平成29年4月	理工学部	1	審査中	－
				農林海洋科学部	1	審査中	－
				医学部	2	審査中	－
		外国人招へい研究者(短期)平成29年度第2回	平成29年4月	医学部	1	審査中	－
		外国人特別研究員(欧米短期)平成29年度第3回	平成29年4月	農林海洋科学部	1	審査中	－
		平成29年度サマープログラム	－	理工学部	1	1	渡航費 滞在費534,000円 調査研究費158,500円
	国立研究開発法人 科学技術振興機構	日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成29年度第2回募集	平成29年4月	黒潮圏総合科学専攻	1	審査中	－
	(独)日本学生支援機構	平成29年度海外留学支援制度(協定派遣)	平成28年10月	全学	1	1	2,800,000円
				教育学部	1	1	240,000円
				地域協働学部	2	1	240,000円
				土佐さきがけプログラム	1	0	－
		平成29年度海外留学支援制度(協定受入)	平成28年10月	地域協働学部	2	1	1,200,000円
				土佐さきがけプログラム	1	0	－
平成28年度	(独)日本学術振興会	外国人特別研究員(一般) 平成28年度第2回	平成28年4月	農林海洋科学部	1	0	－
				海洋コア	1	0	－
				医学部	1	0	－
		外国人特別研究員(一般)平成29年度第1回	平成28年8月	医学部	2	0	―
		外国人招へい研究者(短期) 平成28年度第2回	平成28年4月	農林海洋科学部	1	0	―
		外国人招へい研究者(短期) 平成29年度第1回	平成28年8月	理学部	1	0	―
				農林海洋科学部	1	1	滞在費18,000円／日 国際航空券 海外旅行保険
				地域協働学部	1	1	
		二国間交流事業共同研究・セミナー 平成29年度	平成28年9月	医学部	1	0	―
				総合研究センター	1	審査中	―
	国立研究開発法人 科学技術振興機構	日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第2回募集	平成28年7月	黒潮圏総合科学専攻	1	0	―
		日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第3回募集	平成28年10月	黒潮圏総合科学専攻	1	1	2,536,578円
	(独)日本学生支援機構	平成29年度海外留学支援制度(協定派遣)	平成28年10月	地域協働学部	1	1	450,000円
		平成29年度海外留学支援制度(協定受入)	平成28年10月	地域協働学部	2	2	1,760,000円
		平成28年度帰国外国人留学生短期研究制度	平成28年12月	農林海洋科学部	1	1	滞在費11,000円／日 往復航空券 受入協力費50,000円
平成27年度	(独)日本学術振興会	外国人特別研究員(一般) 平成27年度第2回	平成27年5月	農学部	2	0	―
			平成27年5月	医学部	1	0	―
		論文博士号取得希望者に対する支援事業 平成28年度	平成27年8月	農学部	1	0	―
		外国人招へい研究者(長期) 平成28年	平成27年8月	農学部	1	0	―
			平成27年8月	総合研究センター	1	1	3,876,000円 国際航空券 海外旅行保険
		外国人特別研究員(一般) 平成28年度第1回	平成27年8月	農学部	1	0	―
		外国人特別研究員(推薦)	－	理学部	1	1	8,888,000円 往復航空券 海外旅行保険
		二国間交流事業共同研究・セミナー 平成28年度	平成27年9月	海洋コア	1	1	2,400,000
			平成27年9月	農学部	1	0	―
			平成27年9月	医学部	1	0	―
			平成27年9月	総合研究センター	1	1	2,500,000円
	(独)日本学術振興会・公益社団法人 日本工学アカデミー	日豪若手研究者交流促進事業 平成27年度	平成27年4月	理学部	1	0	―
	国立研究開発法人 科学技術振興機構	日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成27年度第2回募集	平成27年6月	黒潮圏総合科学専攻	1	1	2,869,790円
		日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第1回募集	平成28年3月	農学部	1	1	3,187,360円
	(独)日本学生支援機構	平成28年度帰国外国人留学生短期研究制度	平成27年12月	農学部	1	1	990,000円 往復航空券
			平成27年12月	総合研究センター	1	0	―
		平成28年度海外留学支援制度(協定派遣)	平成26年10月	総合教育センター	1	1	550,000円
				農学部	1	1	840,000円
		平成28年度海外留学支援制度(協定受入)	平成26年10月	総合教育センター	1	0	―
				人文学部	1	1	210,000円
		公益財団法人中島記念国際交流財団助成による平成28年度留学生地域交流事業	平成28年3月	国際連携推進センター	1	0	―
	一般財団法人　日本国際協力センター	対日理解促進交流プログラム(北米事業KAKEHASHI派遣プログラム)	平成27年9月	全学	1	1	学生13名派遣
平成26年度	(独)日本学術振興会	外国人特別研究員(一般) 平成26年度第2回	平成26年5月	医学部	1	0	―
			平成26年5月	農学部	6	0	―
			平成26年5月	理学部	1	0	―
		外国人特別研究員(一般) 平成27年度第1回	平成26年9月	農学部	2	0	―
			平成26年9月	医学部	2	0	―
		外国人招へい研究者(長期) 平成27年度	平成26年9月	農学部	1	0	―
			平成26年9月	総合研究センター	1	0	―
		論文博士号取得希望者に対する支援事業 平成27年度	平成26年8月	医学部	1	0	―
		二国間交流事業共同研究・セミナー 平成27年度	平成27年2月	医学部	1	0	―
	(独)日本学生支援機構	平成27年度海外留学支援制度(協定派遣　短期研修・研究型)	平成25年11月	総合教育センター	1	1	690,000円
				医学部	1	0	―
				農学部	1	0	―
		平成27年度海外留学支援制度(協定受入　短期研修・研究型)	平成25年11月	総合教育センター	1	1	560,000円
		帰国外国人留学生短期研究制度	平成27年2月	農学部	2	0	―
	国立研究開発法人 科学技術振興機構	日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成26年度第1回募集	平成26年5月	農学部	3	1	3,213,069円
				黒潮圏総合科学専攻	1	1	3,083,469円
		日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成26年度第2回募集	平成26年7月	農学部	1	0	―
				高知大学SUIJI推進室	1	1	3,324,838円
		日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成27年度第1回募集	平成27年2月	農学部	2	1	3,719,760円